

英語に於ける名詞的表現の諸相（Ⅱ）

——主として文章体に於ける場合のそれを中心にして——

小 林 永 二*

On Some Aspects of Noun-oriented Expressions in the English
Language with Special Emphasis on Those in the written form

Eiji KOBAYASHI

1. 英語名詞表現瞥見

普通には英語に於ける名詞的表現と云えば、例の無生物主語や抽象名詞主語、更には、擬人法（Personification）による、謂ゆる他動詞を用いた構文（この他動詞構文に用いられる主な他動詞としては、bring, drive, induce, lead, put, tell, cause, find, keep, leave, send, lay, compel, force, make, take, 等々がある）として知られる。「他動性表現」なるものがその代表的なものとして考えられ、この「他動性表現」なるものが、一般に簡潔で、引締った、力強い印象を与えることは、それらが先ず、大半は単文で書かれていることであろう。つまり、この「他動性表現」はそれを欠く日本語的表現に（つまり和文ではその場合大抵は複文構造をとる）慣れ切った我々の耳目には、非常に新鮮で、スッキリとした表現法と映るのである。二、三の例に当てみよう。

(1) This sad news brought tears to her eyes. (この悲しい知らせを聞いて、彼女は目に涙を浮べた。)

(2) Despair compelled him to commit suicide. (彼は絶望の余り、自殺に追い込まれてしまった。)

(3) The payment of my debts left me penniless. (借金を支払ってしまったら、後には一文も残らなかった。)

(4) And presently a bad cold laid her up for a fortnight. (そして間もなく、彼女はひどい風邪をひいて、2週間も寝込んでしまった。)

(5) The insult left me speechless. (そんな侮辱を受けて、私は物も云えなかった。)

(6) The bare idea made me shudder. (それを考えただけで、私は身ふるいがした。)

(7) His misfortunes sent him mad. (度重なる不幸のために、彼は発狂してしまった。)

(8) The mere sight of it will turn your mind. (それを見さえすればあなたは気持が変るでしょう。)

(9) This road will lead you to the station. (この道を行けば、あなたは駅へ出るでしょう。)

*英語英文学研究室（昭和58年9月30日受理）

(10) *A few steps brought him to a post office.* (数歩歩くと彼はとある郵便局の前に出た。)

いずれにせよ、この *inanimate* な物を主語とする英文の表現法が、日本人にとっては一見奇異な感を与えることも否めない事実であることは、やはり日本文では主として *animate* なものしか主語に立たない場合が圧倒的に多いからであろう。尤も明治以降、謂ゆる「翻訳調」、「欧文脈」なるものが現われ、その影響で、日本文の表現も *inanimate* な物を主語とする言い方が若干行われる様になっては来た。この問題については又後で少し触れてみたいと思う。つまりそれは英語における名詞中心的表現の再確認にもつながると思うからである。

ところで、この「他動性表現」の次に考えられる英語名詞表現として、特によく「口語英語」に多用される。一連の基本的な *colorless verb* (例えば, *have, give, take, make, get, keep, do, go, run, put, set, turn, stand, come, fall, look, lay, be,* 等々) とそれに見合う名詞との連語関係 (*collocation*) とも云える結合に見られる表現が考えられる。若干の実例を見てみよう。

(1) *He gave me a shy smile and left the room.* (彼は恥ずかしそうに私の方に微笑して、部屋を出て行った。)

(2) *Give me a buzz later, will you?* (後で電話してくれよな。)

(3) *He took a last drag on his cigarette.* (彼は最後にもう一息タバコを吸い込んだ。)

(4) *I had a good sleep last night.* (昨夜は僕はよく眠った。)

(5) *He made a hurried entry.* (彼は急いで入場した。)

(6) *He is a slow walker.* (彼は足が遅い。)

(7) *She made a polite bow to me.* (彼女は私に、ていねいにお辞儀した。)

(8) *The car made a right at the corner.* (その車は角の所を右へ曲った。)

(9) *We had a long wait for the bus.* (私達はバスを長く待っていた。)

(10) *Take another look at the painting.* (もう一度その絵を見てごらん。)

さてこのことに関連して少し考えてみたいことがある。それはこれらの表現にみられる文型が主として「S+V+O」の型をとっていることである。実はこの「S+V+O」なる文型の多用は、本来、英語の属している「印欧語」(これは即ち「屈折語」である)の性、数、格、人称等による複雑な屈折語尾変化の殆んどを英語が *Modern English* 以降喪失し、むしろ中国語の様な孤立語に近い傾向を見せ始めている現象と無縁のものではない。つまり屈折語尾変化の少ない英語としては、どうしても「語順の固定化」に依存せざるを得なくなる。つまり英語はその屈折語尾変化の喪失及び単純化に伴って、その語順の固定化が進んで行ったものと思われる。しかもその際の語順とは、即ち、「S+V+O」のそれである。

これまで英語に於いて名詞表現の多用ないしは愛用と云うことを問題にしてきたのであるが、実は英語において、「S+V+O」の語順の固定化が、その様な名詞表現の多用を助長してきたのではあるまいか。これは例えば前述の、無生物、抽象名詞主語に見る「他動性表現」に於ける文型の主役が実はこの「S+V+O」なる文型である事実とも無関係ではない。つまり、「S+V+O」の文型の優位性は、*animate subject* のみならず、否応なしに *inanimate subject* をも生み出さざるを得ない。さもなければ英語の表現力はかなり貧弱なものとならざるを得ないのである。更に「S+V+O」の文型は必然的に

その大部分が謂ゆる「名詞止メ」になる。この辺りも日本語の「S+O+V」の表現とは決定的に異なるところで、日本語に於いては、よほど意図的に文章を考えない限り、謂ゆる「体言止メ」なる表現は作れないのである。例えば英語では前置詞に導かれた修飾語句は必然的に被修飾語の後に置かれることになるが、日本語では後置詞を用いるため、その後置詞を従えた目的語なり、修飾語句は、述語や被修飾語の前に位置することになる。このことから英語では「S+V+O」文型の「名詞止メ」となり、日本語では「S+O+V」文型の「用言止メ」が多くなる。この様な見方も英語に「体言止メ」の多く見られる原因の一つと考えられるのではなかろうか。

ところで、英語に於いても、日本語におけると同様、やはり文末は文頭と同様に、表現の効果上重要な位置であることに変わりはあるまい。つまり「文末を名詞で止める」ことには、それなりの効果があるのである。そこより colorful な動詞一語で表現するよりも、基本的な colorless verb にそれにふさわしい名詞を組合せて、結果的に「S+V」ではなく、「S+V+O」の文型でまとめる表現法が好まれるようになったのではなかろうか。勿論これには、本来名詞は動詞と異なり、tangible 且つ visible であると言う性質から、具体的で分かりやすく、それだけに Loose Sentence を生み出した英語国民の性分に適合していたが故に多用されてきたのかも知れない。

いずれにせよ、ここでは英語に於ける名詞多用、名詞愛用、名詞中心的表現の実態とその効果、更には、若干の無理を覚悟で、その英文に於ける語順との関連、思想の構え方としての Loose Sentence 等との関わり方の面からも、英語の名詞中心的性格に approach してみようと試みているのである。

さて、ここでもう一度、「名詞止メ」の問題を見てみよう。実はこの場合、必ずしも問題は、「S+V+O」に限られたことはない。「S+V+C」の文型においても、「名詞止メ」の問題は起るのである。少しく実例に当ててみよう。

〔Ⅰ〕「S+V+O」文型に於ける「名詞止メ」の例。

- (1) I had a smoke. (私は一服した)
- (2) I had a swim. (私は一泳ぎした)
- (3) We had a good time. (私達は楽しく過した)
- (4) She has a sore throat. (彼女はのどを痛めている)
- (5) Have a chair, please. (どうぞ腰かけて下さい)

〔Ⅱ〕「S+V+C」文型に於ける「名詞止メ」の例。

- (1) She is a good cook. (彼女は料理が上手い)
- (2) He is a dead shot. (彼は射撃がうまい)
- (3) My father is a poor sailor. (私の父は船に弱い)
- (4) She is an English literature major. (彼女は英文学を専攻している)
- (5) My town is a small one. (私の町は小さな町だ。My town is small と比較してみよ。この様な例は英語に数多い。なお He is kind. (用言止メ) に対して、He is a kind man. (体言止メ) の例も研究されたい)

つまりこれらの例は、いずれも「S+V」の文型でも表現可能のものが多く(現に日本語の場合では殆んど「S+V」文型で表わされる方がはるかに多い)にも拘らず、英文ではむしろ、「S+V+O」ないしは、「S+V+C」で表わされる場合が多いのではないかと思われる。

更にこのこととも関連するが、日本語では状況、場面を中心に於て叙述されるに比し、

英語では例の「S+V+O」の文型を用いて、それに係わる主体である人間を主語に立てる場合が多い。例えば次の様な例を考えてみよう。

- (1) 昨夜の映画は面白かった。(I enjoyed the movie last night.)
- (2) 彼女の目は青く、髪の毛はブロンドです。(She has blue eyes and blond hair.)
- (3) 去年は雨が多く降った。(We had much rain last year.)
- (4) 私達の泊まったホテルは豪華だった。(We put up at a luxury hotel.)

(4)の例は一見したところ「S+V+O」文型ではないが、実際は、We put ourselves up ~の如く再帰用法なのであり、この再帰用法そのものが非常に英語的な他動詞表現である。それはそれとして、ここでは英文の主語が We になっているところが和文と表現が異なっている。更に a luxury hotel の様に「名詞+名詞」の複合語も名詞表現の一種と見られなくもない。つまりこれを a luxurious hotel と云う様に、「形容詞+名詞」の表現も可能であるが、やはり「名詞+名詞」の結合の方が Punch が効いている)

- (5) 彼の趣味は多彩だ。(He has a variety of hobbies.)

これらの例にも見られる如く、どうも英語は「S+V+O」文型が好みらしい。つまり英語では主客の対立の上に立ってそれを他動詞が間に立って結び付けており、逆に言えば、両側から名詞が中に立つ動詞をはさみ打ちした恰好になっている。この様な状況で屈折語尾変化に乏しい近代以降の英語では当然にも語順は inflexible なものとならざるを得まい。これを統語論の立場から言えば、英語はますます総合的言語から、分析的言語に移行しつつあると云えるのである。

さてここで改めて考えてみたいことは、英語に於てはこの様な名詞構文なり他動性表現や物主構文なりが非常に複雑多岐に亘ってその発達が見られるのに比し、日本語でのこの分野の発達はあまり見られない。何度も述べている様に、日本語にも物主構文や他動性表現が存在しないわけではなく、それなりに数え上げて行けば、そこそこに意外なところで名詞的表現が使われていることに驚くことも決してないわけではない。ただこの際留意すべきは、云うまでもなく、これら日本語に於ける名詞表現は「漢語表現」に負うところが大きく、それを抜きにしてはまず考えられないことである。本来の「大和言葉」のみで、その様な名詞的表現をしようとするには非常な無理がある様だ。日本語に与えた漢語的表現の影響は測り知れない程大きく、それは我々が日本語の中に漢字・漢語をこれほど歴史的に長く深く採り入れて来ていることの当然の結果ではあるのだ。従って今日では、日本語の中から、漢字、漢語、更には漢語表現を取除いて日本語を考えることは不可能に近く、否応なしに我々は今日あるがままの姿の日本語の実態に則して物事を論じて行かざるを得ないのである。ただ日本語への漢語の導入のメリット、デメリットと云う段になると、これは一概に論ぜられぬ程その両者は複雑に絡み合って存在していると云えよう。例えば、漢語、漢語表現は日本語の中に、簡潔さや、便利さをもたらしてくれている反面では、日本人のコトバによるコミュニケーションを、聴覚型から視覚型のそれに変容させてしまった責任を負っていると云えよう。日本語の中にある尨大な同音異義語の存在などはその典型である。つまりこれらの同音異義語は音だけ聞いてもその意味が判読しにくく、文字を見て始めて理解出来ると云った類のものである。これなどは漢語の持つ造語力の豊かさが裏目に出たものと云えるかも知れぬ。ところで造語力と云う時は、何も漢語だけではない。大和コトバにも本来造語力はあり、又昨今はカタカナ外来語も強力な造語力を具えつつあると云える。例えば和製英語と一口に云っても、その中には確かに元の正しい英語を採り入れる際に間違っって日本語に入れる場合もあるにはあるが、中には日本人が勝手

に従来からのカタカナ語を組合せて新しいカタカナ語を創出する場合もあるので、オフィス・レディーやデパート・ガールなどは明らかに後者の例であり、いずれにせよ、昨今のカタカナ外来語の持つ造語力も可成りのものである。

2. 英語「名詞表現」の捉え方とその具体例詳説

さて前章に於いて英語に於ける名詞的表現の若干の「相」について瞥見したのであるが、それらはいくまでも英語に於いて、その多種多様にして且つ多彩な姿を見せている名詞表現のほんの一部について文字通り瞥見したに過ぎない。その様な瞥見では複雑な諸相を見せる英語名詞表現の全容はおろかその片鱗すらもこれを掴み得ていない。従ってこの章に於いて今一つそれら名詞表現を質量ともに深く掘り下げて、そしてその為には何よりも豊富な実例を数多く具体的に掲げて行く過程を通して、はじめて納得の行く名詞表現の実体に迫ることが出来るのである。ただ具体例と云ってもその数は尨大なものであり、それらに逐一説明解説を加えて行くとなれば、この様な小論文に於いて到底なし得るわけのものではない。どうしても割愛せねばならぬ部分も出てこざるを得ない。その辺りをどの様にうまく処理するかで筆者も今回はかなり苦勞をしたのである。従って中にはうまく脈絡のとれていない説明や、具体例の選択に今一つ工夫がほしかったものも後になってみると全くなかったわけではない。

更にここでは「名詞表現」と云っても特に文章体の中でのそれを主眼とし、必ずしも日常のコミュニケーションで最も広く活用されている「口語体」や「談話体」の実例に焦点が置かれているわけではない。併し少しはそれらにも触れてみたいと思い、折を見ては英語国民のコミュニケーションに於ける実際の姿とは一体如何なるものであるやも、考えてみたが、恐らく「口語英語」に於ける日常の英米人のコミュニケーションは、名詞表現をフルに活用した、非常にキビキビした、卒直な、活力に充ちたヤリトリが行われているであろうと想像される。（例えば、次のA、B間に於ける会話、A：Thanks.（ありがとうございました）B：Any time.（何時でもお役に立ちますよ）を見れば分かることだが、これなどはただ名詞をおつけ合うだけの実に単純明快なものだが、日本語ではとてもこうは行かない。日本語ではいくら親しい仲でも、或る程度は「丁寧体」を用い、従って動詞や補助動詞、助動詞が必要となり、結果的に英語と比べて冗長な表現とならざるを得まいことは、お互い日本人としてその日常会話に於いて経験するところである）

更に英語では、文章体に於ても、口語体のそれには及ばないまでも、やはり名詞表現の特性から必然的に招来される単文調の明快で力強い文章が多いのではなからうか。例えば、アメリカの文豪ヘミングウェイの小説の文体などは、簡潔で、punchの効いた「単文」が連続して現われてくるわけだが、これなどは複文よりは単文、更に名詞表現を好む現代アメリカ英語の一般的傾向の典型ではなからうか。それに加えて現代英語、特にアメリカ英語は、若干専門的な用語を使って云えば、屈折語的総合言語から、ヨリますます統語的分析言語への傾斜を深めて行く側面も又持ち合わせていると云えるのではなからうか。例えば現代アメリカ英語に於ける謂ゆる「機能語」(function word)への依存はよく知られている。この点で英語は屈折語の性格を失いつつあり、ヨリ中国語の様な孤立語へと近付きつつあるのではないか。例えば、現代英語においては、前置詞が目覚ましい活躍をしているのであるが、それは多くの場合、名詞と結合して、形容詞句や副詞句を作っているのであるが、これは二つの側面から興味深い。

即ち、その第一は、「前置詞+名詞」の結合は、云うまでもなく、そこに名詞が使用され

ている点で、たとえそれが形容詞や副詞の働きを文章の中ではしていても、やはり名詞的な表現であることには違いないのである。そのあたりは日本語の形容詞や副詞の形態と比較すれば容易に理解されるところである。更に第二に、前述した如く、今日の英語では、例えば「前置詞 of + 抽象名詞」でもって形容詞の働きをもたせるものがあるが (of use = useful, of help = helpful, etc.) これなどは、屈折法 (inflection) によらず、統語法 (syntax) により、同一文法関係が多くの屈折語尾に該当する of と云う前置詞で代替されている典型的な例であり、前置詞句と云われる out of についても、同様名詞と結合して数多くの修飾句が創出される (out of work, out of gas, out of money, etc.)。これも英語が言語学者の謂ゆる、総合的言語 (synthetic language) から、分析的言語 (analytic language) へと移行しつつあることの一例に過ぎない。而して、この分析的言語は、人間の思想・感情の表現手段として、これを純技術的見地よりすれば、ヨリ適合性があり、総合的言語よりも簡潔で、「名詞主体の表現も多い」ことからして、力強い、テキパキとした明快な表現を生み出すのである。これに更に「文の省略」なる文法的に云って能率的簡易性が加わってくることもある。例えば、**Funny thing, she loves such a nasty guy.** などの文に於ける **funny thing** の部分が名詞そのままの形で書かれているが、本来ならばここは **though it is a funny thing** とか、何かいづれにせよ文章体となるところであろう。つまり接続詞を用いた正式な型の複文である。

しかしそれが名詞のままズバリ居座っていることにより、非常に能率的であると同時に、簡潔で **Punch** の効いた表現となっている。つまりここで大胆な云い方をお許し願えれば、今日の特にアメリカ英語の大きな特徴として、名詞を主体とした簡潔で力強く、且又実務的な能率と何よりも明快で解りやすい表現が非常に推奨され、又事実その様な表現が数多く生みだされ、現実にも広く愛用されていると云う事実が一方に蔽として存在しているのである。勿論これは文章英語におけるよりも、口語英語に於てその傾向はヨリ一層顕著に見られることは云うまでもないことである。以上のことなどを念頭におきながら、今後色々な機会に色々な英文にあたりながら、その特徴をよく観察してみたい。特に日本語の表現との比較と云う観点、視点を常によくわきまえながら、又更に日英両語の発想の違いから来る表現の差異等にも気を配りながら、現代英語のキビキビした力強い、簡潔な、平明にして味深い魅力ある文章に数多く触れてほしいものだ。そこよりして、おのずから名詞主体の現代英語表現の真髄を自らも体得し得るのである。

それではこれより極く簡単に英語に於ける名詞表現の諸相を実例を通し、更にそれに相当する和文表現との比較をも行いつつ、その特徴の解明に当たってみたい (更に詳しい実例については、後の名詞表現諸例Ⅱに挙げることにする。) 例えば、日本語ではどうしても複文形式となり易い (これは日本語の動詞中心的性格、叙述部に中心の置かれる文章完結型の性格から由来する) 文章表現が、対照的に英語では謂ゆる名詞表現の使用により、単文形式で表現され得る場合がある。この際和文が仮りに単文形式で表現されても、やはり表現の中心が叙述的な動詞中心型となっている。(実例) **He is a clock watcher.** (彼はいつも退社時間が迫ると、時計ばかり気にして見ている) これなどは典型的な英文と和文の表現差の見られるもので、この様な実例は数多い。 **Most Japanese are Indian givers.** (大ていの日本人は、何か見返りを期待して贈物をする。), **She is an arm-chair traveler.** (彼女は居ながらにして読書などを通して世界のことをよく知っている), **He is a backseat driver.** [彼は後部座席から前席の運転者に対して、その運転ぶりにとやかく口を出す。(これには又、影にいて人を繰っている黒幕的人物の意もある)], **He is a dark**

horse. (彼はひょっとすると当選するかも知れない有力候補だ) **He is a king maker.**
(彼は要職の振り当てなどに参画する政党の実力者だ)

これらの例はまだまだいくらでもある。ここで面白いことは、この様な英語における名詞ズバリの簡潔な表現が、実は日本語の中にも取入れられて意外とよく使われていることである。考えて見ればこのことはやはり日本語ではこの様な名詞表現が実現しにくい体質を持っていることの証左ではなからうかと云うことである。例えば、オピニオン・リーダーであるとか、ホワイトカラー、ブルーカラー、サラリーマン、ワンマンカー、ベストセラー、ベスト・ドレッサー、ノーカーデイ、イエスマン等々日本語の中で使われているこれら英語（中には和製英語もあるが）の名詞表現を仮りに日本語に翻訳するとすれば、恐らく名詞一語ズバリの表現はしにくく、どうしても冗長な文章体となり、その辺りに英語の簡潔表現がそのまま使われる理由が存するのではなからうかと思われてならない。もっともこれらのカタカナ外来語の使用については、諸々の理由、見方、解釈が可能であり（例えば、何故に訳語を与えないのか、訳語を与えるとして、大和コトバを用いるか、それとも漢語を用いるか等々）、一概には云えないのだが、とにかく結果的には英語の名詞的表現が簡潔で便利であることは否めない。ただし筆者は日本語での名詞表現を用いた訳語の可能性を決して否定するものではないことは云うまでもない。従って日本人がカタカナ外来語の方を好んで使用しているとすれば、単に翻訳上の難易と云うことだけでなく、もっと心理的、文化的な要因が絡んでいると思われる。少し話はあるが、仮りに名詞表現を使うと、日本語に於いて結果的に敬意表現のヨリ少い表現となることは興味深い。何故なら日本語での敬意表現は主として動詞、補助動詞、助動詞等で表わされることが多いからだ。その点でも名詞表現は特に日本語の様な用言性の強い、付属語を多用する性格の言語の表現形式を簡潔化させる効用を持つとも云える。

あとまだ若干の例をあげておくと、

He is a poor sailor. (彼は船酔いしやすい) **He is a part-timer.** [(彼はパートタイムで働いている。) これなどは日本語になりにくい例だ.] 更に, **a love seat** [(ロマンス・シート) この訳語はいわゆる和製英語となっているが、その場合ですら日本語では和製英語の力を借りないと名詞的に表現しにくいところが、面白い現象である。昨今はカタカナ外来語も漢語並みに造語力を持つに至っていることは注目に値する。(ラブ・ホテルなどはその典型例) これらの英語名詞句の和訳を見てもらえばよく分るが、いずれも和文では名詞ズバリで表現されず、動詞を用いて文章体をとるか、英語の表現をそのまま借りて(和製英語の場合もあるが) いることに注目されたいのである。

更に日常の口語体表現に於ける名詞ズバリの表現は英語に非常に多く、日本語ではこの場合もやはり文章体となる場合が多い様である。しかしこの口語体における「挨拶語」、人に対する「呼称」、その他喜怒哀楽の「感情表現」における名詞的表現については別の機会に詳述する積りなのでここでは簡単な例を挙げるだけに止めておく。 **Ex. A: Thanks.** (ありがとう) **B: My pleasure.** (どう致しまして) A, B共に名詞を投げつけているだけである点に注意。

(**Many happy returns of the day! Happy birthday to you!** (御誕生日おめでとう) "**Morning, Captain, Lieutenant,**" said Fish. (「お早うございます、隊長さん、隊長補佐さん」とフィッシュは云った) この後の方の表現をよく見て頂きたい。英語ではただ3つの名詞がそのままズバリ並んでいるだけである。つまり英文では、「朝、隊長、隊長補佐」と名詞が他の言葉を介在させることなくズラズラと並んでいるだけで上の和訳と

比べてもらえば分るが、確かに英文と和文との表現形式には何処か越えられぬ壁の様なものの存在を感じてならないのである。軍隊で兵隊に対する号令として、日本語で、「気を付け！」と云うところも、英語では、“**Attention!**”と名詞一語で表現される。日本語の場合は云うまでもなく動詞を用いて文章体に近い型をとっている。これとは少し話は違うが、日本語で「ゴミ箱」とか、「ゴミ入れ」などと書いてあるのをよく見かけるが、これも考えてみると一種の暗に文章体の感じがある。つまり「これはゴミを入れる為の箱ですよ」、とか、「ここにゴミを入れなさい」、と云った叙述的表現をとっていることがその背後に感じられるのだが、これも英語では単に、**Trash** (ゴミ) と名詞一語で書かれている。

「ペンキ塗り立て」も、英語では **Wet Paint** であり、やはり「名詞止メ」で終わっているのに比し、和文ではどうもやはり文章体の匂いが濃く、「ペンキを今塗り立てたところだから触れてはいけませんよ」と云う気持が背後に潜んでおり、その文章体を、「ペンキ塗り立て」の様な省略体で表現したものと考えられてならない。「塗り立て」の部分は典型的な2語動詞から成り、「立て」の部分は一応体言化されている様だが、元々は動詞の連用形中止法であり、動詞的性格は未だ完全には払拭されていない。「吸いがら入れ」の場合も同様で「入れ」の部分は動詞連用形の中止法を用いて一見体言化されている様だが、英語の **cigarette butts** なる完全な名詞形ないしは「名詞止メ」と比べると、やはりその動詞的性格ないしは「用言止メ」の性格は否定され得ない。「飲料用冷水」なる表示を筆者は旅行中の車内で見かけたことがあるが、その場合の英語は単に **chilled water** であって、いちいち「飲料用」などとは断っていない。つまりやはり日本語では、「これは飲む為に冷やしてある水ですよ」と云いたい気持が背後にあり、それを省略して、乃至は漢語調で重々しく表現する為に「飲料用冷水」としたのであろう。更に「乗務員用」なるドアの表示も英語では“**Staff**” だけであり、「乗務員の為の部屋なんですよ」と云う日本的な云い回しや、「乗務員用」なる権威的な漢語調の響きはない。更に「乗務員以外立入り禁止」なる表示もよくアチコチで見かけるが、これも英語では、“**Staff Only**” であって、日本語のその様な用言性の強い、且又威嚇的な響きのある表現とはかなりの差異がある。「禁止」の部分は漢語を使った為に「名詞止メ」で終わっているが、「禁ず」乃至は「禁止する」なる大和コトバ化された動詞を使えばやはり「用言止メ」とはなる。日本では謂ゆるお役所コトバや官庁用語などには権威を持たせる為に漢語をヤタラと使いたがる傾向があり、その為表現全体が名詞多用となることもあり、且又「名詞止メ」にもなり得る。ただし大和コトバの場合はよく、動詞の連用形中止法で終る。「未成年者入場御断り」などもその例で、英語では“**No minors.**”と「名詞止メ」であり、且又文章体ではない。ただ面白いことは、「御断り」と大和コトバで云われると、「禁止」なる漢語よりも当りが柔かいことで、この辺りも研究の余地がある。つまり先ず「用言止メ」は「名詞止メ」に比べてやはり迫力(**Punch**)に欠けることと、「御断り」の「御」なる接頭辞が表現を婉曲なものとするのに役立っている。映画用語でよく使われる、“**Action!**”も、日本語では「演技始め！」となるところであろうが、英語の名詞一語ズバリの表現が簡潔で力強く、迅速さが要求される様な場面では、日本語の中に入ってそのまま愛用されている。警察用語にある「了解」なる漢語もやはり大和コトバではその様な場合迫力に欠け、緊急時には役立たない為であろう。スポーツの様な「動き」と「スピード」と「迫力」が要求されるゲーム用語としては、何も野球が舶来のゲームであるからカタカナ外来語の使用が多いと云うだけの理由ではなく、やはり英語の持つ名詞表現の簡潔さと迫力が野球の中に数多くのカタカナ外来語の使用を許しているものと思われてならない。戦時中、軍隊では大和コトバや「訓読み」を出来る限り

廃し、漢語や「音読み」を奨励したことはよく知られた事実で、例えば「物干場」は「ブツカンジョウ」と云い、編上靴は「ヘンジョウカ」となり、この辺りは能率と機動性を重んずる軍隊として分らぬでもないが、カタカナ外来語を排するのあまり「カレーライス」を「カラムイリシルカケメシ」、「コロッケ」を「アブラアゲニクマンジュウ」などとしたのは逆に冗長そのものでいただけない。この様なムリの永続きする筈もあるまい。ただ日本語の中に永年にわたって定着し、頻繁に使用されているカタカナ外来語については、その和訳の必然性もあまりなく、その使用に当ってそれなりの理由もあってのことなのであろう。更にこの様な例はまだまだ存するので、キリはないのであるが参考までにあと二、三の例を挙げておこう。

筆者などがよく外国を旅行して感じることであるが、たまたま手洗に行こうとした場合、日本で習った、日本語でも使っているあの例の **toilet** なる語を探し求めてもなかなか見当らないのである。（勿論「御手洗」なり、「便所」の意を表わすのに他の多くの語があり、英米により若干相異はあるが、**washroom, restroom, lavatory, comfort room, public conveniences, W.C. etc.** がある）ところでもう賢明なる読者諸士にはおわかりと思うが、実はアチラでは、トイレにわざわざ **Toilet**（手洗所、使所）などとは書いてなく、ただ **MEN, WOMEN** 或いは **Gentlemen, Ladies** とだけしか書いてない場合が圧倒的に多いのだ。日本では、まずまず大抵の場合、「手洗所」なり「御手洗」なりの文字があり、その上で、「男子用」、「女子用」などと書いてある場合が普通である。さてここには単に名詞表現と云った問題だけでなく外にも二、三の面白い指摘が日英語の表現比較と云った観点から為し得るのである。

先ずはこれまでも何度も云ってきた様に、英語では日本語における様に、男子「用」、女子「用」と云った、「用」の文字が使われていない。このことは、日本語では、どうしても叙述的、文章体的発想から抜け出せず、これは「男子が用いるための場所です」と云った表現が背後にあってそれを縮めて、「男子用」としたのであろう。併し英語の方には、「～用」はなく、単に名詞一言ズバリ、“**Gentlemen**”なり、“**MEN**”で表現されている。次に日本語では、「手洗所」なり「御手洗」なり、場合によっては「便所」と云うのもあるが、いずれにせよ、やはり **toilet** の意味を表わす文字が書かれている。この問題は色々の角度からの説明が可能かも知れない。まず英語では、そこがトイレであることが解っている場合は、いちいちそれを表示しない。それよりも、その実際的な便宜、必要性、つまり男女の差と云った面から、「**MEN**」、「**WOMEN**」の方を表示するだけで済ませる。これは先述の「乗務員室立入禁止」のことについても、まずそこが「部屋」であることは自明のことなので、いちいち **room** なる語は英語では用いない。要は「無用の者が立入っては困る」と云う実用的、便宜的なことだけを述べれば足りるので、“**Staff only**”なり、“**Off limits**”なりの表現となって出てくるのである。更にここで日本語では「立入禁止」だの、「～することを禁ず」だのと、否定命令形で表現されているのに、英語ではその様な強い禁止の否定命令形でなく、「従業員のみ入って下さい」だの、「**limits** から離れていて下さい」だの、例の **Keep off the grass** も、「芝生から離れていて下さい」と云った感じの、非常に柔かい民主的（と云うのも、日本語の、「～することを禁ず」だの、「立入禁止」だのと云う表現は如何にも、お上意識の強い権威主義的、官尊民卑の伝統を思わせてならない）で、肯定形を用いた表現となっている。さてもう一つの問題として、何故英語で、「手洗所」なり、「便所」などの文字が書かれていない（勿論、英米でもこの様な意味の文字が表示されている場合もないわけでは決してないが）のかと云うに、どうも人間の生理的な欲求

をそのまま生のかたちでズバリと表現したくないと云った心理も働いているのではなからうか。出来れば何も云わずに済ませたい。これは例の **euphemism** (婉曲表現) の問題とも関連している様に思えてならない。現にアメリカあたりで使われている、**washroom**, **restroom** など明らかに **euphemistic** な表現であり、日本語の「手洗所」なども同様である。「便所」と云うのはやはりあまり直截に過ぎる。更にもう一つの問題、「御」手洗だの、「御便所」だのと、トイレにまで、「御」をつける表現心理(勿論こんな問題は英語では一切起らないし、又起り様もない)については、それなりに研究分析してみる価値はあるが、ここでは長くなるので、割愛させていただくことにする。それらは日本語に特有の敬語表現の一形態として別個に詳述したい。更に会社などで、**Information** と書いた英語の表示と並んで、日本語では、「御案内」なり、「受付」などと書いてあるが、これも英語の原意とはかなり距たりがある。「御案内」の方には、何か日本社会特有の「過保護」の響きがあり、「受付」に至っては、これも又日本社会に未だに根強い **authoritarianism** の匂いがする。それとは別に、ここでもやかり英語の名詞一言ズバリの **information** と云う名詞的表現に対して、日本語では、「御案内します」だの、「受け付けます」だのと云った、述語中心、文章体に近い文意の表現がその底に流れている。これはホテルのフロントについても同様のことが云えるが、今では英語の「**Front**」がそのまま日本語でも使われている。「スクール・バス」なる英語がそのまま日本でも使われているが、これも英語から借用した表現だからこの様に云えるので、これを若し仮りに日本式に日本語で云うとなれば、「児童用バス」なり、「学校専用バス」、「生徒児童専用バス」なりとなることは必定で、どうしても「専用」なる文字がついてくる。英語の様に、「学校バス」とはなるまい。例の海外旅行で必ず御厄介になる、「出入国管理」なり「出入国審査」などの機関も、英語では名詞一言ズバリ "**Immigration**" であり、日本語に於ける如く、「管理」だの「審査」だのと云った権威主義的な響のないことは勿論であるが、日本語ではやはり叙述的、文章的に「～を管理します」、「～を審査致します」と云った名残りを止めている。

かくの如く、色々と日英両語間の表現上の差異を、日常の極く些細な字句についてだけでも、上述して来た様なかなりの違いが見出されるのであり、これらは実は単に日英両語に於ける語法上の相異と云っただけの問題ではなく、そこには明らかに、それらの言語をそれぞれ用いている民族の「文化的伝統」なり、「心的態様」がその背後に色濃く投影されていることを否めないのである。そこより日英両語間に種々の表現上の差異の生ずるそれなりの理由が存するのである。ところでこの辺りで今一度英語名詞表現の諸相の一端を整理要約して置くことにしようと思う。

〔1〕 謂ゆる物主構文(無生物・抽象名詞主語、擬人法などを指し、主として他動詞が用いられるところから、「他動詞構文」と呼ぶこともある。例としては次の様なものが考えられよう。

A 20-minute limousine ride will take you to the airport. (リムジンに乗って20分程行けば空港に着きますよ) ここで和訳では「乗る」「行く」「着く」など3つの動詞が用いられているのに比し、英文では **take** なる動詞1つで事足りている。**What has brought you here?** (どう云う理由であなたはここへいらっしゃったのですか?) これはどう見ても原文の英文の引締った他動詞構文の力強さに比し、和文のそれは自動詞構文で、且つその敬意表現が冗長さに拍車をかけているのであるが、この様な「物云い」こそが、和文表現の一大特徴であることは否めない事実である。

A closer look at it will tell you that it is not a dog. (もっと近寄ってよく見れば、それが犬でないことがお分りになりますよ) なお、擬人法 (personification) の例としては、Those who love Nature she loves in return. (自然を愛する人々を自然も又愛してくれるものである) この和訳は如何にも rigid な「翻訳調」の域を出ないものだが、例えば「自然」なる漢語訳そのものが、それに当る大和コトバがなく (つまり上代日本人には「自然」と云う漢語の表わす抽象概念がなく、ただ具体的に「山河」「草木」「雲水」「花鳥」「月日」と云う様な捉え方しか出来なかった。尤も和語が抽象語に弱いことは、何もこれに始まることでなく、漢語や外来語と比較して一般的に見られる傾向である) 上代日本人は、「自然」について云えば、その言葉と共に、その概念そのものも中国から借り入れたわけである。そのことが頭にある故か、この訳文が、「唐心」や、「洋魂」でなく、「大和ごころ」を持つ筆者などには余計に生硬 (rigid) に響くのである。更に「愛する」と云うサ行変格動詞も仲々の曲者である。云うまでもなく、「愛」と云う言葉は漢語であり、中国渡来の語であるが、これはかなり古くから日本人の間でも使われていたらしい。例えば、平安末期に書かれた、「今昔物語集」の中に、「愛する」と云う言葉が使われてをり、「堤中納言物語」の中にも「愛す」が見出される。ただしこれらの中に用いられている、「愛する」の語意は、今日我々が主としてその意として用いる、男女間のそれを指しているのではない。ただ単に小さい可愛い感じのものを「慈しむ」「大切にすると云った意味である。中国語で夫婦間の外向きの呼称として、「愛人」なる言葉があるが、これなどは日本人の間では、とても抵抗感があって使えなからうと思われる。日本では皮肉にも、「愛人」は別の意味で用いられていることは御承知の通りである。我国の現状は、外向きには、妻は夫のことを指して、「主人」と呼び、夫の方は妻を「家内」と呼んでいるが、これなどは、尠くとも言葉の上からでは封建的身分制下の男女関係の残滓を現在に至るも止めているのであり、中国語に於ける如く、独立の一個の対等な人格を持った男女が外に向って相互に、「愛人」と呼び合い、内向きでは相互の first name で呼んでいるのと比べて大きな距りを感じる。因みに大和コトバで「愛す」、「愛する」に当る言葉を探してみれば、「恋う」、「慕う」、「惜しむ」、「好く」、「惚れる」等があるが、これらの大和コトバの方がまだしも「愛す」、「愛する」よりも一般の日本人にはピタリと来るかも知れぬ。いずれにせよ「愛」なる漢語より、「愛する」なるサ変動詞や、「愛す」と云う動詞が出来てきたのであろうが (「愛す」は「愛する」の文語形だが、同時に五段活用をさせると口語にもなる)、とにかくこの動詞は (場合によっては、「愛」と云う名詞も同様だが) 日本人にはしっくりしない語感を持っている様だ。その原因としては種々考えられようが、一つには、ヨーロッパのキリスト教に於ける「神の愛」なる概念が日本人には分り難いことがあり、又中国語に於ける「愛」なる語の真の意味とその用法が、やはり「愛」なる語を本来持ち合わせなかった日本人には分り難く、又實際上使い難くさを感じるのであろう。どうも話が横道にそれてしまった様だが、これまで述べてきた事柄は、単に日英両語間の差異のみならず、日本語の中に於ける「大和コトバ vs. 漢語」の対立関係の問題でもあり、決して看過さるべき事柄ではないのである。

〔2〕 主たる文意の大半が特定の名詞の中に内蔵されて表現されている様な型の名詞表現。その例として、Don't be a litterbug. (ゴミをまき散らさないで下さい) に於いて、和訳の用言部分の冗長な叙述は、英語では a litterbug (散らかし虫) なる名詞一語で集約されている。She is an archaeology major. (彼女は大学で考古学を専攻しています) に於いても、major なる名詞一語で、「大学で学位を取る為に～を専攻している学生」

と云う和訳では極めて用言性の強い表現が、見事に名詞集約的に表現されているのである。

This book is a best-seller (この本は今一番よく売れている本だ) に於ける **a best-seller** についても同様のことが云える。

〔3〕「S+V+C」文型に於ける特にここではCが状況補語として使われている名詞表現の例としては、(上例(2)も文型としては「S+V+C」となっているが、少し意味合いがちがうので、ここでは同列には取扱わないことにした。)

He writes a good hand. (彼は字が上手い)

They parted good friends. (彼等は仲よく別れた)

He died a beggar. (彼はのたれ死にした)

He lives a bachelor. (彼は独身で暮している)

〔4〕「S+V+O」文型に於ける名詞表現は非常に多い。と云うよりも、この「S+V+O」文型は英語の基本文型であり、その文中に現われる頻度も最も高い。詳しい実例は後程掲げるので、ここでは、2, 3の例に止めておく。

We have no school today. (私達は今日学校は休みです)

She made a deep bow. (彼女は深くお辞儀した)

They had fun playing cards. (彼等はトランプをして楽しんだ)

He took a little sip of coffee. (彼はコーヒーを少しすすって飲んだ)

The police gave chase to the murderer. (警察はその殺人犯の後を追った)

He gave a forced smile. (彼は苦笑した)

Do you want a transmission fluid oil check, too? (トランスミッションの液体オイルの方もチェックしておきましょうか?)

〔5〕「S+V+O+O」文型に於ける名詞表現であるが、主としてgiveなるdative verbを用いた型のものが多い。**Give it a push, will you?** (それをちょっと押してみてください) **He gave her a long stare.** (彼は彼女を長い間じっと見つめていた。) **She did him a good turn.** (彼女は彼に親切にしてあげた) **Give it a try, anyway.** (とにかくやってみてください) **He gave her a black eye.** (彼は顔がはれ上るほど彼女をなぐりつけた) **New York gave me a hard life.** (ニューヨークでの生活は私にとってきびしいものだった)

〔6〕all+名詞(主として抽象名詞が多いが、中には普通名詞の複数形もくる) **He is all attention.** (彼は全神経を集中して注意している) **She is all anxiety.** (彼女は全く心配し切っている) **His fingers are all thumbs.** (彼はひどく無器用だ) **She was all eyes.** (彼女は目を皿の様に注目した) **He is all man.** (彼は全く男らしい男だ。)

〔7〕「名詞+of+名詞」の型。of+抽象名詞で形容詞を作ることによく知られたところだが、ここでは、「名詞+of」で形容詞の働きをよくしている。働きは形容詞でありながら、その内味は名詞が中心となっているところから、これをも名詞表現の一つの相と捉えてよい。

He is a bit of a poet. (彼はちょっとした詩人だ) **She is a fool of an actress.** (彼女は馬鹿な女優だ) **He was a jewel of a servant.** (彼は宝石にも比すべき召使だった) **A monster of a bee stung him.** (怪物の様に大きな密蜂が彼を刺した) **Mr. Johnson was a boy of a captain.** (ジョンソン氏は子供の様な船長であった)

〔8〕謂ゆる「名詞止め」に終る型。日本語でも、短歌や俳句などに謂ゆる「休言止め」と云う表現上の技法があるが、英語では「名詞止め」の型を好んで用いる傾向が見られる。

He is kind. に対して、**He is a kind man.** と云う様に **man** と云う名詞を用いて、「名詞止め」にする。この方が文が安定すると同時に名詞 **man** を用いた為に全体として彼と云う人間の人格の全体像が鮮明に、強烈に浮び上がってくるという効果がある。

She is beautiful. に対する **She is a beautiful woman.** 或いは **She is a beauty.** なども同様のことが云える。**Her hometown is small.** に対する **Her hometown is a small one.** なども **hometown** を **one** と云う代名詞で受けたもので、やはり、「体言止め」を作っているのであるが、仲々興味深い表現法ではある。同様の例として次の様なものがある。

The meeting was a strained one. (その会合はムリヤリ召集された会合だった)

My own memory was never a good one. (私自身の記憶は決して良いものでなかった。)なお、これらの例文中の **one** は品詞分類上は名詞ではなく代名詞であるが、英語では同じ名詞の反復を避けるためによく用いられることがあり、内容的に名詞を受けていることは云うまでもない。**His nose is a big one** (彼の鼻は大きな鼻だ) なども同様である。ところで先程、日本の伝統的詩歌の代表である、短歌と俳句に於ける「体言止め」の話に触れたのであるが、今度はもう少し具体的に両者の違いと云ったものを、その内部の「品詞構成」と云った観点から考察してみたいと思うのである。これは一体どういうことかと云うに、つまり「短歌」なり「俳句」なりを構成している。それぞれ31文字と17文字の中の各語の「品詞構成」はどの様になっているのか、特に体言と用言の使用比率は両者に於いてどの様に違っているのかと云った問題であり、そこより結果的に体言 vs. 用言の使用頻度およびその相対的使用比率が、短歌と俳句の表現内容や、読者に与える印象・効果にどの様に影響しているのか等の問題を探ってみたいと云うことなのである。勿論この問題は本論の主題とは若干それるところもあるのではあるが、併し同時に各品詞の中の「名詞」の持つ特性なり、効果を知る上での有力な手掛りを与えてくれるのではないかと筆者なりの秘かな願望がこめられてもいるのである。

普通品詞の分類として、日本語では10品詞（名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、連体詞、接続詞、感動詞、助動詞、助詞）があり、英語のそれは8品詞（名詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞、接続詞、前置詞、間投詞）とされる。ところでそのいずれを問わず「名詞」が最も重要で、文中に於いて不可欠の要素であることを否定する者はいまい。名詞を欠く文章はおよそ何について述べているのかその主題さえ解らないのであるから、名詞の第一義的な重要性は何人もこれを否定し得ないのである。ところで、「俳句」の場合の様に極端に字数の制限された、それこそ世界で最短詩形を持つと云われるわずか17文字（語数と云うことになると17はおろか、ほんの数語前後になると考えられる）の中に作者の気持を盛り込むとなると、必然的にその描写は、暗示的、且つ極度に圧縮された表現、即ち、例えば「寸鉄人を殺す」と云った類のもので（麁くとも形式上は）なければならぬまい。英語にこれを求むれば、例えば **epigram** や **metaphor** と云った様な表現がそれに当る。ところでこの場合、その様に極端に限られた字数の中での表現なのであるから、当然にも、又必然的にも、その表現の中心は名詞に傾かざるを得ない。例えば英語の **metaphor**（隠喩）にも名詞を中心としたものが多いのも、この間の事情を物語っていると云える。俳句に、「体言止め」ないしは、体言を用いた語句の多いのも同じ理由に依るものと思われる。一方、短歌の方はどうかと言うに、こちらは31文字で俳句の17文字に比してかなりの字数の余裕がある。従ってその表現形態に於いて必ずしも名詞中心主義に傾く必然性は弱いのであって、用言特に動詞なども十分に活躍出来る余地がある。このことは短

歌の描写が俳句に比し、一般に情緒的で、柔かく、叙情性の強いものとなっている有力な一閃でもある。少しく乱暴な云い方をお許し願えるなら、俳句の表現形式は名詞中心の英語的表現法に近く、短歌のそれは動詞主体の典型的な大和コトバによる表現形態とも云えようか。勿論短歌にも「体言止め」の表現法があるわけだが、それは特に安定した、力強い、パンチ (punch) の効いた表現効果を狙って使用される場合であり、決して一般的なものではない。尤もそのことは、逆に名詞が如何に「punch の効いた表現」に不可欠のものであるかの証左ともなっていると云えよう。以上のことから人間の意志、感情の表出に名詞は決定的に重要な役割を担っており、同時に我々の脳裏に鮮明で印象深いイメージを喚起させる力を持っている。勿論これは名詞の持つ visible で tangible な性格、「静的安定性」と「意味の自立性」および「具体性」等々の本来の属性と無縁のものではない。

さて如何なる言語に於ても、名詞の全語彙に占める比率とその使用頻度は他の品詞に比し最も高く、中国語や英語にその典型例を見ることが出来る。特に孤立語に属する中国語は、その文字は、原則として一字・一音・一声・一意味であり、文法的な言語と云うよりも語彙的な言語であり、それよりして中国語の造語力は抜群で、特にその名詞造りの柔軟性は他にその例を見ない。これらの事実より中国語は英語をも凌駕する極めて名詞集約性の強い言語であり、本来の単音節性の音節構造とも相俟って、全体としてまことに簡潔な言語となっている。漢語を早くより受け入れた日本語が、その造語力を武器として数多くの日本製字音語を歴史的に創造し来たった事は御承知の通りである。この事が本来、用言的性格の強い日本語に体言的性格を付与し来たった事実を我々は否定することは出来ないのである。特に明治以降、漢語二字の組合せによる西欧語の翻訳語が夥しい数にまで創出され、同時に文体の上では謂ゆる「翻訳調」なる特殊な文体を生むに至ったのであるが、それらを一貫して流れている特徴は、日本語固有の和語を中心とした用言性の強い表現・描写法に対して、漢語・外来語をふんだんに用いた極めて体言集約性の強い文体のものであり、その典型を我々は、謂ゆる「学術論文」や「新聞記事の見出し」、「文学辞典」等々の類いの中に見ることが出来る。

併しこの事に関して翻訳調の「文章体」ではなく、尠くとも日常の基本的な「談話体」の中では、未だに基本的和語の使用比率は漢語・外来語に比して圧倒的に高く、和語の健闘ぶりが目立つ。しかしここで問題となることの一つは、それらの和語の中には名詞が極めて少く、話題の中心となるべき重要な語たる名詞は、その殆んどが漢語であり、中にはカタカナ外来語も、特に最近では目立つ存在となりつつあると云う事実である。これは日本語の将来を考える際に看過し得ぬ重大な問題を提起しているのではなからうか。

〔9〕 「名詞+名詞」の型。これには尠くとも3つの場合が考えられる。

〔i〕 本来「形容詞+名詞」の型であったものが、形容詞を用いず、その部分を名詞にして、より強烈・鮮明な印象を与えようとする表現効果を狙ったもので、現代アメリカ英語 (Contemporary Americanism) に特にその傾向が顕著に見られる。早速実例を見てみよう。

「形容詞+名詞」型	(和訳)	「名詞+名詞」型
sexual desire	(性的欲求)	sex desire
a luxurious hotel	(豪華ホテル)	a luxury hotel
a mysterious woman	(謎の女)	a mystery woman
cultured pearls	(養殖真珠)	culture pearls
iced water	(氷水)	ice water

cultural lag	(文化のズレ)	culture lag
cultural pattern	(文化様式)	culture pattern
sexual education	(性教育)	sex education
the sexual instinct	(性本能)	the sex instinct
the Educational Ministry	(文部省)	the Education Ministry
a scientific book	(科学の本)	a science book
educational system	(教育制度)	education system

(ii) 「名詞+and+名詞」の型¹⁾ 早速実例を検討してみよう。

milk and water (水割り牛乳) 英語では御覧の通り, **milk** と **water** なる名詞二語が **and** なる接続詞で結び付けられているだけなのに, 和訳の方では, 「水で割って薄めた牛乳」と云った具合に途中の経過を動的に表現したいが為に結果的に「水割り牛乳」なる云い廻しとはなるのであろう。アメリカで **highball** と呼ばれている「ウイスキーをソーダで割った飲物」も **whisky and soda** であって, 日本語の様に, 「ウイスキーのソーダ割り」なる表現とは異なっている。 **bread and butter** (バター付きパン) は **buttered bread** の意であり, **curry and rice** (カレーライス) などは和訳でも二語の名詞をそのまま羅列しているが, ひょっとすると **curried rice** が訛って日本語の「カレーライス」になったのかも知れぬ。同様のことは, 日本語の「サラリーマン」に当る **a salaried man** なる英語についても考えられる事で, 語尾の **ed** 型が発音しにくいために抜け落ちて, 偶然日本語で名詞二語が並列しているのかも知れぬ。

(iii) 「名詞+名詞」型の複合名詞を形成しているものであるが, この型式の場合, 英語では単に名詞がそのまま並列されてその間に何らの統語的機能を司さざる謂ゆる機能語 (**function word**) は介在していないのに比し, 和訳する場合にはやはり何らかの動詞的要素が介在せざるを得ない様である。早速実例を通してその間の事情を垣間見よう。

water cart (水売りの車) **fire drill** (防火訓練) **water cooler** (飲用水冷却器) **fire station** (消防署) **hand pump** (手押しポンプ) **sea bank** (防波堤) **day laborer** (日雇い労働者) **water closet** (水洗便所) **sun helmet** (日除け帽) **night letter** (夜間発送電報) **card tray** (名刺受け盆), **parking ticket** (駐車違反カード) **water pipe** (送水管) **air stop** (ヘリコプター発着所) **life belt** (救命帯) **air station** (飛行機着陸場) **life jacket** (救命胴衣) **window glass** (窓用ガラス) **money market** (金融市場) **night light** (終夜灯) **fire wall** (防火壁) **ground crew** (集合的に云った飛行場の地上整備員) **fire bell** (出火警鐘) **fire company** (消防隊) **ground staff** (集合的に云った地上勤務員)

引続き, この辺りで品詞の転用 (**Functional Shift**) とも関連して特に名詞の形容詞的用法, および複合名詞 (**Noun Compounds**) 「名詞(N)+名詞(N)」結合について更に若干の実例に基付きながら少しく詳細に解説を試みたい。これも本来ならば形容詞を用いて名詞を修飾させるか, それとも前置詞の **of** などを用いて後から前の名詞を修飾させる等の方法もあるわけなのだが, 敢えて名詞を並列的に列べて簡潔で力強い表現力を持たせる特別の効果を狙ったものなのであろう。確かにこの様な「N+N」結合(例えば **History of the United States** に対して, **United states Hisory** の様な表現がある)が現代アメリカ英語に特に好まれている傾向は存在する様である。早速実例に当たりながらその生態を今一度確認しておきたい。

(1) **the bedroom window** (**the window of the bed-room** よりも直接「N+N」の

型が好まれる。日本語ではこの場合どうしても「寝室の窓」の如く「～の」と云う助詞が必要となり、英語の様にそのまま名詞を二つ並べるわけにはこの場合は出来まい。the bedroom closet door に至っては「寝室にある押入れのドア」の如く「N+N+N」と名詞が三つ羅列されている。非常に引締った力強く簡潔な名詞表現の一典型と云えよう。更にその他の例として、a fruit store owner「果物店経営者」や、a giant package tour「大型パッケージ旅行」、the Senate Investigations Subcommittee「上院調査小委員会」、Quality Improvement Program「品質改善計画」、a grocery store clerk「食料雑貨店店員」などはすべて「N+N+N」型結合になっている。この型の例も数多く、又後程挙げることにする)

(2) the steel desk (鋼鉄製の机の意だが、日本語ではやはり「N+N」型結合は無理な様だ。皮肉にもカタカナ語としては、スチール・デスクは可能であるが、鋼鉄机にはやはり少し無理がある)

(3) a luxury liner (豪華客船の意だが、この場合は日本語でも「N+N」結合は可能の様だ。ただ英語の場合、a luxurious liner も可能なわけだが、やはりこの様に「N+N」結合の方に Punch がある。luxury hotel も同様例)

(4) a career girl (これなどはそのまま日本語でも使用されているが、やはり適当な訳語が見当らない故もあろう。つまり仮にこれを説明しようとするややはり冗長な訳語にならざるを得ず、そのままの英語の云い方に自動的に従ったのではなからうか。これに似た表現に an office girl などがあるが、これもどうもそのままの「N+N」の和訳はむずかしそうで、従って英語のままの簡便な云い方に従っているのではなからうか。)

(5) student power (これなども～power としていくらでも使える表現で、やはり「N+N」の簡潔で力強い表現の味がズバリ出ているもので、やはり日本語の訳語でそのまま「学生力」とは云えまい。従ってそのまま英語の云い方に従っているものと思われる。)

(6) a six-room apartment (6間のアパートの意だが、この場合は a six-roomed apartment も可能だが、前者の云い方が特にアメリカでは好まれる様である。)

(7) occupation army (占領軍の意だが、これも occupied army と云う表現もあるが、やはり「N+N」結合の前者の表現の方が Punch が効いている。)

(8) culture shock (これもすでに日本語の中に入った表現だが、この場合 cultural shock と云う表現も可能だが、この型では日本語にも入っていない。やはり culture shock と云う表現の方がそのものズバリの迫力が感じられる。culture pearl 養殖真珠も同様例。)

(9) generation gap (これなどもそのままの形で日本語の中でも使われているが、これを和訳すると、「世代間のズレ」の様にやはり「～の」と云う助詞が必要となろう。英語では generational gap とは云わず、この様に「N+N」で使われる場合がほとんどである。)

(10) science fiction (謂ゆるSF物の小説のことだが、これを scientific fiction とは云わぬ様である。因みに history book (歴史の本)も historical book と云う様だが、やはり history bookの方が単刀直入でよい。SF小説は science fiction novel の如く「N+N+N」型ともなる)

(11) Education Minister (文部大臣のことだが、これも Educational Minister と云えそうだが、前者の様な云い方が好んで用いられているようだ。)

(12) a mystery girl (「謎の女」とでも云うか。これも a mysterious girl と云え当然云えるわけだが、やはり a mystery girl と云った方が謎めいてくるので不思議なもの

だ。a mystery death (謎の死) も同様例。)

(13) a corner drugstore (通りの角にあるドラッグストアの意だが、この様な「N+N」結合は如何にも Punch が効いているのではないか、そもそも drugstore そのものがすでに複合名詞になっているところへ、もう一つ前に名詞をつけたわけで、日本語の訳語と比べて英語の「N+N」の名詞二語結合の簡潔さが如実に発揮されている好例である。)

(14) a miracle man (「奇蹟を呼ぶ男」とでも訳すか、これも a miraculous man よりも、はるかに強い印象を与える。更にやはり日本語ではこの場合英語における如き「N+N」結合による表現は無理なようだ。)

(15) the London bus (「ロンドン行きのバス」の意だが、これなども誠に簡潔そのものズバリの表現ではある。the bus for London などに比べてその簡便さに改めて気付くのである。更にこの場合 the 8:30p.m. London bus などの云い方も勿論可能である。いずれにせよ簡潔な名詞表現ではある。)

(16) identity crisis (これなどは最も日本語になりにくい英語であると云える。おそらく文章体で2, 3行にわたって説明的に云うより手があるまい。とにかくこの英語の名詞二語の云い方は実に見事である。)

(17) convenience store (これなども日本語にはなりにくいものの一つである。考えてみれば supermarket などなかなか日本語になりにくいだろう。尤もこれは複合語とは云えないかも知れぬが、外に a corner drugstore 等)

(18) the fire station (これは消防署の意だが随分英語の表現とは異なっているものだ。the fire exit なども「非常口」などと訳されているが、これも英語の表現とはかなりくい違っている。英語ではどちらも fire なる語が共通に用いられているに比し、日本語訳ではそれぞれ異なった訳語が用いられてをり、しかも fire=火なる訳語は使われていない。この問題はそれなりに深い意味がありそうだが、ここではこれ以上深入りしない。)

(19) Neighborhood Police Post (シンガポールで NPP と略して呼ばれている日本の交番に倣って作られた派出所の様なものである。この場合は3つの名詞が羅列して使われているが、特に最初の語が、形容詞でなく名詞になっているところに注目されたい。この種の表現は外にも色々あるが、例えば the neighborhood school (その近辺の学校) などもあり、仲々興味深い。更にもう一つ the neighborhood people とは「隣近所の人達」の意だが、the neighboring people とならず、この様に「N+N」結合になっているところが新鮮な感じを与える。これらと似た表現に poverty people なる表現もあるが、これも従来なら poor people と我々は覚えてきた筈のものだが、やはり「N+N」結合にして、その poor な状態が強く前面に打ち出されてくるのである。外に fool talk (バカ話) などもある。)

(20) grocery store (これも英国あたりでは grocer's store の方が優勢だが、アメリカでは grocery store の方が優勢である。これとほぼ同様の例として、barber's shop に対する barber shop があり、どうやらアメリカ英語の方が屈折語尾変化を伴わない「N+N」結合を好む様である。an eight-storeyed building に対して、an eight-story building (8階建の建物) などその例であるが、その他にもこの様な例は多いのである)

(21) economy class (これも日本語の中にすでに入っている盛んに使われている言葉だが、考えてみると、economical class でも良いわけだが、その様には先ず使われず、この様に「N+N」の結合で使用される。)

(22) an organization man (組織に入って働いている人間のことだが、これに似たもの

として、**a company man** (会社人間)なども考えられる.)

㉓ **a giant corporation** (大会社とでも云うか、とにかく非常に規模の大きな会社を指すのだが、この場合も、**a gigantic corporation** では表現力の弱さが感じられる。やはりここはズバリ「N+N」結合でなければならぬ様な気がする.)

㉔ **government buildings** (政府関係の建物の意だが、**governmental buildings** とならぬところが面白い。同様の例が、**government officials** などにも云える。更に **government issue** (官給品)なども面白い.)

㉕ **a patrolcar officer** (パトロール・カーに乗って警らしている警官の意味だが、これなどは如何にも英語らしい複合名詞の連続だと云える。それは **patrol car** そのものがすでに複合名詞であり、それに続けて **officer** がついているわけで、似た例に、**a night watchman** (夜警) などがあるが、この場合はうまく訳語がつけられるが、どうも **a patrolcar officer** には簡単に適切な訳語は見付からず、つまり **patrol car** そのものがパトカーの如く外来カタカナ語として使っているわけで、すでにそれだけで適当な日本語訳が無いところへ、更に **officer** が加わっているので、とてもうまく訳せない。仮りに何らかの訳語を工夫してみても、反って難解な漢語を使わざるを得ず、それならばいっそカタカナ外来語のまま使用した方が分り易い。実はこの様な類のもの、つまり漢語訳の難解さを避け、カタカナ語でそのまま使用している西歐語は数多い.)

㉖ **match girl** (これは、例のアンデルセンの童話の中にある話で、日本では、「マッチ売りの少女」などと云う題名で翻訳されている様だが、英文では、「売る」と云う動詞は全く見当らない。尤も日本語では、「マッチ少女」ではどうしても舌足らずと云うか、やはり何か物足りなく、どうしても動詞の部分が必要なのであろうが、この辺りの日英語の表現法なり、語法の差異は、もっと深く研究してみる必要がありそうである.)

㉗ **fire tower** (「火の見やぐら」とでも訳すか。いずれにせよ、日本語では、「火事を見るためのやぐら」と云う考えが根底にあって、そのため、結果的に、簡略的に「火の見やぐら」としたのであろうが、英文ではあくまでも二語の名詞が羅列されているだけで、動詞の入り込む余地はない様である。同様の例として次の表現にも気を付けてほしい。

fire sale 「焼け残り品の 特売」の意なのだが、これには如何にも参ったと云う感が深い。つまり日本語では、例によって二語の動詞が連動的に使用されている。「掘り出し物」なども同様二語動詞が体言を修飾して行く形をとっている.)

㉘ **milkman** (「牛乳配達人」のことだが、やはり日本語では、「配達」なる動詞的概念を持った語を取り去るわけにはこの場合いくまい。**postman** も同様、「郵便配達夫」であろう。この様な例は当然乍ら、外にも数多くあることは想像に難くない.)

㉙ **handbag** (「手提げカバン」のことである。日本語を見れば分る通り、「手で提げるためのカバン」と云う考えが根底にあるため、又そのことを動作主体で表現しようとするため、結果的に、「手提げカバン」となるのであろう。これと似た例として、**hand lever** なども、「手動レバー」と訳されてをり、やはり根底に、「手で動かす～」と云った動作主体の描写をしたい為に、和訳ではこの様な云い方になるのだろう.)

㉚ **powder horn** (「角製火薬入れ」これなども先ず角で作ったの意で「角製」とあり、次に火薬を入れるためのものを示す為に「火薬入れ」と訳されているが、英語ではただ名詞ズバリが「N+N」と並列に置かれ複合名詞を作っている.)

更に昨今のアメリカ英語の特徴として、前置詞などの省略により、結果的に名詞表現を作るものがある。前置詞に限らず、接続詞やその他のさして重要でない語句の省略がどん

どん進み、一種の電文を読んでいるかの如き観を呈する様な文章に出くわすことも多い。ここに述べた複合名詞の「N+N」型の様な単に二つの名詞を並べたものに限らず、更に三つ、四つの名詞（「N+N+N+…」型）を並べたものも現代アメリカ英語の中には散見し得る。department store clearance sale（百貨店の一掃セール）や、a Paris sidewalk cafe（パリの歩道に張り出したカフェ）等がその例である。同じ英語と云っても、どうやら Americanism の方に Briticism よりもより多彩な名詞表現が活用されている事実を指摘して置きたい。）

〔10〕人間関係に於ける「呼称」や、「挨拶語」、人間の喜怒哀楽を表わす種々の「感情表現」の中で用いられる名詞をそのままズバリ投げつける形での名詞表現の型であるが、これはそれだけで一つの大きなテーマたり得る表現の型で、いずれ稿を改めて詳述したく思っているのであるが、参考までに若干の例だけあげて置こう。和訳部分とよく比較検討願いたい。

Congratulations!（おめでとう。／）All my eye!（ばかばかしい。／）Beans!（バカなことを云うな、お前の云う事など信じないぞ。／）Honey or Sugar（ネェ、お前。ネェ、アンタなど夫婦間の呼称）Bullshit!（デタラメ云うな。／）My hat!（やゝ、あゝ、まあ。／など驚きの叫び）Fudge!（バカな。／）No sweat!（案じることはないよ。／）Hot dog!（ああ、うれしい。／）No reduction!（負からんよ。／）Good riddance!（いゝ厄介払いだ。／）sugar plum or honey pie（いずれも夫婦恋人間での呼称）my love（夫婦間の呼称）old thing（おい君）my boy!（ネェ君、男への親しい呼びかけ）Driver!（運転手さん。／）Waiter!（給仕さん。／）Hey, pop（ちょっと、おっさん）Happy motoring!（たのしく自動車旅行してね。／）Thanks.（ありがとよ）My word!（おやおや。／これは驚いた。／）Oh, brother!（そんなバカな。／）Poor beggar!（かわいそうに。／）Good deal!（すばらしい。／）Tops!（最高だ。／）Good man!（よくやった。／うまいぞ）、Hell!（畜生。／）、Heaven and earth!（オヤオヤ。／あれ、どうしよう。／）、Jesus!（アレマア、畜生。／）、Heavens!（オヤマア。／）、sure thing!（もちろん。／）、baby（愛人に対する呼びかけ語）、Shucks!（下らん。／バカな。／）、Snooks!（下らん。／）、Snacks!（山分けにしろ。／）My God!（おやまあ。／）等、Good morning, Good afternoon, Good evening, Good night などの日常挨拶語については今更云うまでもあるまい。その殆んどが若干の形容語句を伴って「名詞止め」に終わっている。Happy birthday! Happy New Year!, Merry Christmas! Happy Easter! 等々その例は数多い。ところで前述した通り、これらは英語名詞表現の一端を垣間見たものに過ぎず、中には類型化に必ずしも馴染まぬタイプの名詞表現もないわけではない。いずれにせよ、複雑な諸相を多岐に亘って見せている英語名詞表現の全容をこの様な小論文の中で一挙に把えることは到底不可能な事である。手近なところから step by step で研究を推し進めて行く以外に有効な方法は見当たらないわけで、とにかく出来るだけ数多くの実例に当たって、日英両語間に於ける表現上の差異（場合によってはその類似性も含めて）を具体的に考究してみたく、これより若干の具体例に入ろう。

〔Ⅰ〕英語名詞表現諸例Ⅰ

以下に掲げる英語に於ける名詞中心的表现の諸例については、英文の原文に対する和訳の方もよく見て頂きたい。つまり英語の原文の方では主として表現の最も重要な部分が名詞で表現されているのに比し、和訳の方の場合は、表現の中心が主として動詞を中心とした用言にあり、その叙述形式は主として「動作」を中心とした「動態的表现」であり、英語

に於ける如き主としてその動作の「結果・状態」に重きを置いた「静態的表現」との対照がよく感じとられる筈である。このことは又、「語形成」(word-making)の様態が日英両語に於いて非常な差異のあることとも大いに関係するのであるが、この日英両語の語彙体系の中での「語形成」(word-making)の内部構造や様態についての比較対照の問題はそれだけで又十分な研究対象とも成り得るテーマであり、ここでは割愛させて頂くこととして又次の機会を待ちたい。それでは次にいよいよ英語名詞表現の具体例を数多く挙げてみることにしたい。英文と日本語の訳文とをよくよく比較検討して頂きたい。

(1) **Beverly Hills Visitors Bureau** [「ビバリーヒルズ観光案内所」とでも訳すか。勿論、例によって和訳する時には漢語を用いないと訳しにくいわけだが、その場合でも、「観光」や「案内」と云う、一見したところ名詞の様に見えるが、実はその実体は、「観光する」とか、「案内する」と云った、例の「漢語名詞+する」の型に於ける如き、日本人としては、これらを動詞的概念を連想しつつ受け取っているとも考えられなくもない。英文の場合、visitors においては「訪問する人達」の如く、元の動詞 visit が変化して visitors なる名詞になったわけで、その中にまだ若干の用言性が窺えなくもない。しかし「案内」とか「案内する」とかの語に当る英語はここには無い。この辺りが日本語の表現と決定的に異なるところで、つまり日本語の表現としては動作叙述的な語を常に必要とする傾向があるに比し、英語の場合ではそれを欠いても別に何の支障もないわけで、この辺りの事情については他の箇所でも詳しい説明を加えておいた積りである]

(2) **the number one attractions** [これなどはむしろ漢語を用いて訳さない方が良からう。となると今度は大和コトバを用いて冗長な文章体をとらざるを得まい。もっともそれらのことからナンバーワンなどはカタカナ外来語としてそのまま使用されている昨今ではある。いずれにせよその意味は、「どうしても訪れてみなければならぬ魅力ある観光地」のことである]

(3) **Texas drawl** [「テキサス訛り」のことだが、Texas の形容詞としては Texan があり、Texan drawl とも云えなくはないわけだが、この様に「N+N」型で表現する方が普通である。ただし例の「南部訛り」と云うのは、'Southern drawl' が普通で、South drawl とは云わぬ様である]

(4) **a maximum security prison** [「N+N+N」型の三語の名詞が羅列されている型の表現で、「最大限に防備堅固な刑務所」の意である。この和文訳を見せられて逆に上述の様な英文の表現が我々日本人にすぐに書けるか疑問である。我々としてはどうしても文章体をとるか、さもなくば形容詞を用いたいところで、仲々この様に三語の名詞を羅列させるだけの簡潔な名詞表現は余程英語に馴れていないと書けないのではなからうか。但し maximum は形容詞ともとれる。形容詞と名詞の品詞区分は統語・形態上の両面からして英語に於いて必ずしも明確ではない]

(5) **sex symbol** [これなどは、どちらも日本語の単語として使われているので、敢えて和訳しないのが普通であろう。この sex の形容詞形は sexual があるわけだが、これは前述もした如く、sex appeal, sex drive, etc. 名詞形で用いられる方が迫力があり、昨今ではその様に使われる方が多い様である]

(6) **a science man** [謂ゆる「科学者」scientist のことでもあるが、これを例えば、a scientific man と書けば、どうやらそれは a scientific-minded man の意であろう。勿論 a man of science の云い方もよく知られている。問題は例の SF 物の 'science fiction' であるが、これを 'scientific fiction' とは云えないのか。歴史の本の意で a

history book を a historic book ないしは a historical book ではどうなのか等々色々問題が惹起される。a science side=科学部門も、a scientific side とは云えないのか等々、とにかく厄介な問題であろうし、意味そのものが異なってくる場合もある。又同じ形容詞と云っても、historic と historical、更には economic と economical ではその表わす意味が違ってくる。ただ筆者が何をここで云いたいのかと云うのは、つまり翻訳、特に和文英訳の場合に、これらの例は実際翻訳者泣かせの典型例だと云うことなのである。形容詞を用いた場合、つまり「adj.+N」の表現と「N+N」の名詞結合の場合とでは、意味そのものが違うのだと云う人もいるが、そして確かにその様な場合も多々あり得るが、併し別に意味に違いはなく、単に慣用法の差異（若干の修辞上の差異は存するが）と云った場合もあり、とにかく事はそれ程単純ではない。ここではこれ以上深入りはしないが、今後の課題ではある]

(7) An inmate trying to get out that way is asking for broken bones, not freedom. 「そんな風に逃げ出そうとする囚人は、自由ではなくて、足の骨を折ることを求めている様なものなんだよ」この訳文もまだまだ生硬な (rigid) ものではあるが、それはさておき、ここでの問題点は、broken bones なる表現で、和訳では「足の骨を折る」の如く、「動詞止め」になっているのに比し、原文の英文では、'broken bones' つまり直訳すると「折られた足」の如く（「名詞止め」になっている。この辺りが実際に日本語訳だけを見て、原文の如き英文が書けるかとなると、これら英文の「名詞止め」表現に馴れていないと 'broken bones' なる英語らしい表現がそうたやすく思い付くものではない。つまりそれだけ動詞中心の日本語表現とは距りのある表現と云うことになるのである。これに類する表現は少し気を付けて見ていると数多く目につくので、He sneaked into the room with bated breath. 「彼は息を殺してその部屋に忍び込んだ」に於ける with bated breath なる表現もその典型例である。さてここでこの事に関して少し掘り下げて考えてみたいことがある。実はこの事は前にも少し触れたのであるが、つまり英語に「名詞止め」が多く、日本語にそれが少なく、謂ゆる「用言止め」が多いことの理由が奈辺に存するのかと云う問題である。例えばここでの例を採り上げて考えてみよう。with bated breath なる句に於いて、with は云うまでもなく前置詞である。従ってその後には名詞なり代名詞若しくは名詞相当語句なりが来ることになる。いずれにせよ前置詞の後にくるものは体言的の性格を帯びたものでないといけな。そこでの場合の bate なる他動詞の用法であるが、この場合、breath なる名詞を修飾しようとする、それを過去分詞形にして受身的な意味の形容詞的用法として用いるしかない。つまりこの様にすると with なる前置詞で始めて、breath なる名詞でうまく収まる形での語句として一つのまとまった型となり得るわけである。さもなくば、謂ゆる分詞構文の型にして bating his breath なり、holding his breath の様な附帯的状况を表わす状況補語として使うしかないわけだが、そうなると、bating はもはや breath にかかる修飾語ではなく、又 breath も被修飾語ではなくて bating の目的語となる。いずれにせよ分詞構文と云うことになれば、接続詞を用いて主語、述語を具えた文章体書き換えられるわけで、そうなるともはや with bated breath に見る如き簡潔な名詞表現とは成り得ない。一方この場合日本語ではどの様な事が云えるのであろうか。「息を殺して」とか「息を潜めて」などの表現についてであるが、先ず「息を」の「を」なる格助詞であるが、（別に格助詞にのみ限るわけではないが）、およそ日本語の助詞は後置詞として用いられるわけであるから、動詞と係わる場合、必然的にその前に置かざるを得なくなる。つまり「息を殺す」となる

のが常道で、「殺す息を」では「を」が何処へも接続し得ず、修飾・被修飾と云う観点から見てもこの語順はあまり感心出来ない。勿論、和歌や俳句その他文章表現上の効果を期待して特別に修辞上の技巧を凝らした倒置構文なども日本語には存在している。しかしそれらはいくまでも例外的に用いられているのであって、普通大抵の場合に用いられる素直な形での日本文の語順は、上の場合では、あくまでも「息を殺す」であって「殺す息を」ではあるまい。この様に後置詞としての助詞を持つ限りに於いて、日本語としてはどうしても「S+V+O」の文型ではなくて、「S+O+V」の文型でないと困るのである。

もっともそうは云っても中国語ではこの辺りの事情は若干異なるところもある様だ。御存じの如く中国語は原則として後置詞ではなく前置詞を用いる。中国語ではこれを「介詞」と呼んでいるわけだが、この様に本来前置詞としての性格を持つ介詞に伴なわれた語句が、英語の場合とは異なって、動詞の前に置かれることがある。その点同じく前置詞を用いる系統の言語である英語とは語順が異なることになる。人はよく中国語の語順は英語と同じ「S+V+O」型のそれと単純に考えている様だが、決してそればかりではないのである。又修飾・被修飾語の位置関係も英中両語に於いて必ずしも常に一致しているわけではない。次に実例を挙げて少しくこの間の事情を吟味してみよう。

実例Ⅰ. 你把照相机带上吧。(あなたはカメラを持って行きなさい) (**you'd better take your camera.**) これを文型の上から分析してみると次の様な構造となっている。

「主語+把+目的語+動詞+補足語」

この場合の把が介詞なのだが、それが目的語と一緒にあって動詞の前に来ていることには、日本人としては違和感はなくむしろ親しみをすら感ずるのであるが、問題は「把」なる介詞が、日本語に於ける様に、目的語の後に来るのではなくて、目的語の前に位置していることである。これは中国語としては当然のことであって何処にも問題はない。では何がここでは問題なのであろうか。つまり筆者の云いたい事は、仮りに目的語を動詞の前に置くのであれば、かりそめにも何らかの格助詞に相当するものを用いると云うのであれば、後置詞の方が前置詞よりも接続関係から云えば好ましいのではなからうかと云う事なのである。併しこれはあくまでも筆者の戯言であって、中国語ではそんな事には絶対にならない。あくまでも上述の文型通りの語順となるのである。

実例Ⅱ. 他在北京住了几年?なる問に対する答えの文として次の中文を考える。他在北京住了五年。(彼は五年北京に住みました) (**He lived in Peking for five years.**)

この場合の介詞「在」の位置も、修飾・被修飾の関係や接続具合から云えば、北京の前ではなくて、その後の方が妥当の様に思えるのだが、実際はそんな馬鹿な事にはならない。それとも英語と同じ様に「在北京」の部分こそっくり「住了」の後にもってくるかであるが、どうもそれも慣用的ではない様だ。

どうもこの様に見てくると、日本語と英語とでは、前者は後置詞、後者は前置詞、文型は前者は「S+O+V」型、後者は「S+V+O」型、と全く相異なる性格の言語でありながら、修飾・被修飾の関係や、語の接続の具合と云う観点から見ると、この例文では日英両語は中国語よりもヨリ合理的である様に思えるのだが如何なものか。勿論これはあくまでもこの場合に限っての話であって他のすべての場合に当てはまるなどと云う性質のものでは決してない。なお実例に出した介詞「把」と「在」の性格、用法は同じ介詞と云っても全く異なるものであることは云うまでもない。

ところで次の問題に移るが、「息を殺して」と云う時の接続助詞の「て」であるが、これは動詞「殺す」の連用形「殺し」に接続するので、否応なく「殺して」と接続助詞「て」

は「殺し」なる動詞連用形の後に置かれる。つまり膠着語たる日本語としては、附属語たる助詞などは、自立語に附属して文字通り後へ後へと附着して行くのである。従って仮に **with bated breath** なる英語を直訳的に「殺された息をもって」などと訳してみたところで、やはり英語の様に「名詞止メ」の表現には成り様がない。つまり英語では前置詞 **with** が用いられるが故に **breath** なる名詞でこの句を止めることが出来るが、前置詞を欠く日本語では、どんなに **bated breath** なる部分を直訳してみたところで所詮「名詞止メ」には成り得ないと云うことなのである。つまりこの様な場合について考えてみるに、英語では前置詞を用いるが故に完全な形での名詞表現が可能であり、日本語では前置詞を欠き後置詞を用いるが故に完全な形での名詞表現が不可能であるのか。確かにそれはその通りなのだが、それだけで英語名詞表現の多用を説明出来るわけではあるまい。併しこの問題はこの辺りで擱くことにして、附属語の性格と語順の関係を今一度考えてみたいと思う。

〔註：筆者がここで「名詞止メ」と云っている用語の意味を今一度確認しておきたい。まず「名詞止メ」と云う語句自体であるが、これは実は「体言止メ」と云ってもよい。否、その方がより正確とも云える。体言と云うことになると、例えば代名詞その他名詞相当語などが含まれてくる。特に日本語文法では、自立語の中で活用がなく、且又主語にも成り得るものを「体言」といっている様である。併し英語文法では体言と云う用語はあまり使用されていないのと、体言の中心はあくまでも名詞であることから、筆者は「体言止メ」と云うべきところを敢えて「名詞止メ」と呼んだことを御諒承願いたい。次にそれに対する存在として「用言止メ」なる用語がある。これも英語としては普通は「動詞止メ」と云ってもよいところなのだが、御承知の様に、日本語文法では、自立語で活用があつて述語と成り得るものは単に動詞のみではない。他に形容詞、形容動詞などもそれだけで（つまり英語に於ける如き **be** 動詞などの **copula** を必要としない）述語と成り得るのであって、それらをひっくるめて「用言」と呼んでいる。従って筆者が「用言止メ」と呼んでいるのは、その様な日本文の場合のことを考慮に入れながら、英語の文章について云う場合も「用言止メ」なる用語を用いている。もっとも英語の文型の一つである「S+V+C」型の場合では実際に英語でも形容詞で文が終る場合もあるわけで、その意味ではこの場合は、日英共通に「用言止メ」と云ってよい。ところで **copula** を必要とせずに、形容詞だけで述語に成り得るのは何も日本語だけに限ったことではなく、朝鮮語や中国語でも同様である。その事実から例えば朝鮮語などでは、動詞と形容詞との品詞区分がアイマイな場合がある。逆に **copula** をとる英語では形容詞と名詞の品詞区分がハッキリしない場合がある。ところで話を元の「名詞止メ」と云うことに戻すが、実はこれには二つの解釈が有り得る。その一つは、文字通り文章が名詞で終る、或いは文末に名詞が来ると云うことである。この場合は日英両語に於いてその勝敗は明らかである。つまり英語の基本型は「S+V+O」であり、更に「S+V+C」の場合もある。いずれにせよVはOやCに先行しているものであり、文末は否応なくOかCで終らざるを得ない。更にOやCに成り得るものはOの場合は体言のみであり、Cの場合も体言である場合が多い。そうなると英語の文章は「名詞止メ」で終る場合が非常に多いことが分る。一方日本語の場合は如何であろうか。少し無理はあるが英語流の文法を借りて表現すれば、日本文の基本文型は「S+O+V」であり且又「S+C+V」であると云える。いずれにせよ文末は「用言止メ」とならざるを得ない。更に日本文ではその表現に「普通体」と「丁寧体」とがあり、一般に「丁寧体」を用いる場合が極めて多い。例の「デス・マス体」をはじめとして、補助動詞なども使われる。さてそうなると、日本人の表現の仕方そのものが「名詞止メ」を阻む場合も起り得るのであ

る。例えば英語では **What's your name?** の問いに対し、**Johnson, Terry Johnson.** などと答えることが多い。この場合、問いの文も答えの文も共に「名詞止メ」となっている。然るに日本文では如何であろうか。「お名前は何とおっしゃいますか?」「ジョンソンです、テリー・ジョンソンと申します」いずれにせよ、名前だけをそのまま投げ返す様な返答の仕方は普通には日本語の表現には馴染まないで、「～です」や「～でございます」とか、「～であります」(旧軍隊調)などで文を終ることになる。この様な表現辞のある言語では折角「名詞止メ」で云える場合でもその様にはならないことになる。和歌や俳句、その他特別の修辞表現の必要から日本語にも謂ゆる「体言止メ」は存在するが、先ず一般的な文章表現の中では日本文は「名詞止メ」に馴染まないとい切っても過言ではない。

さてもう一つの「名詞止メ」の解釈だが、これは表現の中心が名詞に置かれてをり、その名詞以外の他の語句はすべて連体修飾語として被修飾語たる名詞へと集約して行く様なタイプの表現のことで、すべての修飾語が連体修飾語と云う形をとって、回りまわって被修飾語たる一つの名詞のところへ来て止まると云う意味での「名詞止メ」と云う表現のことである。この意味での「名詞止メ」と云うことになれば、実は日本文の中にも数多く見出される。特に明治以降の謂ゆる「翻訳調」の文章を考えて見れば容易に頷けるであろう。例えば、英語の関係代名詞を「～ところの」などと訳し上げて行く例のやり方だが、あれなども日本語の訳文を見ると、バカ長い連体修飾語句がついて結局は一つの名詞へと還元して行く形をとっている。その様な訳し方の当否は別として、明治以降の改文脈の影響として、更には又漢語を用いた翻訳語の多用の結果として、日本文にも、特に現代の日本文に上述の意味での「名詞止メ」表現が数多く見られることは否定し得ないところである。例えば新聞の見出しや、デモのスローガンなどの場合には、この傾向に一層の拍車がかかる。例えば、「言論の自由」死守ノ場合、これを仮に、「あくまでも自由に物を云い続けようノ」などと表現したとして、それで新聞の見出しや、デモのスローガンに用いられるだろうか。これでは全く **punch** が効かない。「自由に物を云い～」のところは、「言論の自由」の様に「連体修飾語+名詞」の型にし、「あくまでも～しよう」のところは「死守」と云うことばを使って「名詞止メ」で終る。そして「言論の自由」なる句そのものが又連体修飾語として死守なる名詞にかかる。かくして政治的スローガンとしての **punch** が出てくるのだ。併し、これには漢語の力を借りないと、とても出来ない相談だ]

ところでこの前置詞を用いるか、後置詞なのかと云う事と語順ないしは文型(「S+V+O」型か「S+O+V」型なのか)との相互連関を考えてみるに、世界の諸言語に於いて、語順が「S+O+V」型である言語に於いては後置詞をとるものが多く、逆に「S+V+O」型の言語に於いては前置詞を用いるものが多い。例えば、前者の例としてはアルタイ諸語、日本語、朝鮮語、アイヌ語などがあり、後者の例としては英語をはじめとするヨーロッパ諸語(勿論多少の例外も存在しないと云わぬが)、マライ・ポリネシア諸語、ヴェトナム語、タイ語、中国語(前置詞とも云うが、特に「介詞」と呼ばれている)等々が挙げられる。勿論これらは一般的な傾向として述べたのであって、個々のこまかい具体的なケースになると若干当てはまらない場合もないわけではない。だが、その事についてはここでは触れない。ただ、筆者としては、前置詞を使うか、後置詞を使っているのかと云う問題と語順延いては文型そのものとの間に相互に連関があるのではないかと云う事は一考に価する問題だと思ふのである]

(8) **death warrant** [「死刑執行令状」とでも和訳されようか。この訳語と英語の原文とを比較すると色々の問題が浮び上ってくる。御覧の通り英語では「執行」と云う用言性の

強いコトバは用いられていないで、ただ二語の名詞が羅列されているだけである。更に日本語の「死刑」なる部分も、英語では単に **death** (死) とだけ書かれている点にも注意。勿論、英語の **death** には「死刑」の意もあるのであり、つまり筆者の云いたいことは、複合名詞の型をとった場合は勿論のこと、一つの単語、特にここでは名詞一語の意味領域も日英両語で当然にも異なるのであり、その場合、英語の名詞は、日本語の立場からすれば、用言的性格をも内包した、日本語の名詞よりも意味領域の広いコトバであるとも云える。**death house** (死刑執行室)、**death roll** (死亡者名簿) etc. についても同様のことが云い得る]

(9) **She has class.** [「彼女には気品がある」英語では典型的な「S + V + O」の文型となっているが、日本語ではそうは行かない。つまり英語では他動詞を用いて、「名詞止メ」となっているに比し、日本語では自動詞が用いられ、「用言止メ」とならざるを得ない。**He is no class.** (彼は下手くそで駄目だ) も、この場合 **class** については「優秀な技量を持った人」とする解釈と、**no class** の前に **of** が省略された、例の「of + 抽象名詞」の型と考えるか、その他諸々考えられるが、いずれにせよ英語では自動詞を用いた場合でもやはり名詞表現は可能である。**a class chess player** (チェスの名人) の場合の **class** は名詞の形容詞的用法と見てよいであろう]

(10) **Demonstration!** [「今からお手本を示すからよく見ておきなさい」何かリーダーとでも呼ばれる人が、研修生を前に技能を実演して見せている様な場面を御想像願いたい。英語では名詞一語ズバリを投げつけているに比し、日本語では冗長な文章体をとっている。本来四疊半的な内輪の人間だけのコミュニケーションしか必要の無かった日本語の在り様の歴史が、アカの他人同志の公の場面での、特に緊急を要する **situation** での「ふさわしい言葉遣い」を未だ欠いているのは当然と云えば当然でもあるのだが、公の場での討論や、命令指揮系統に要するコトバなどを著るしく欠いていることは疑いない。戦時中の軍隊で矢鱈と漢語を羅列して偏重したのも、本来の日本語の中に公の場面で行う **communication** の仕方や用語が発達せず、止むなく必要に迫られて本来外国語である漢語にその抛り所を見出したのであろう。いずれにせよ、これからの日本人も、従来の様な四疊半的、内輪だけの人間が自分達にだけ通ずる様なコトバと表現の仕方で行われてきた **communication** の在り方を根本的に見直すべき時に来ていることは間違いない。日本人とその **mentality** に於いて最も近いとされている韓国人でさえも日本人のコミュニケーションの在り様を、韓国語で (タプタパダ) 「もどかしく、アイマイでスッキリしない」と評している程なのである。同じ東洋人でも韓国人よりも遙るかに卒直明快なコトバを用いて **communication** を行なっている中国人から見れば、我々日本人の **communication** の様態は正に、「令人着急的 or 令人焦急的」なものと映ることであろう。

(11) **My apology, Madam.** [「どうもすみません、奥様」これも **apology** なる名詞が用いられ、日本語ではちょっとこの様な表現は不可能で、その意味で又最も英語的な表現である。「名詞止メ」であることは勿論、もともとは文章体であったのであろうが、その文章の中の最も重要な部分 (英語では大抵の場合それは名詞で表わされることが多い) だけを取り出して、そこに全ての意味を凝縮させてブツつける型の表現をとるのである]

(12) **If you fail to take proper steps against it, you'll be a casualty.** [「もしあんながそれに適当な対抗措置を講じることが出来なければ、痛い目に会うことになります。」云う迄もなく、後半の帰結文の中の **a casualty** の部分が名詞になっていてこの文の文意を集約している]

(13) **He is a horse lover.** [「彼は馬が好きだ」犬については愛犬家なる名詞表現が日本語にもあるが、馬については愛馬家とはどうも云わぬ様だ。ただし大和コトバ風に「馬好き」と云う名詞の造語は可能ではある。つまり「彼は馬好きだ」となる。これと似たものに、**I am a bird fancier.** に対し「私は鳥が好きだ」or「私は愛鳥家だ」or「私は鳥好きだ」といずれも可能な訳だが、真中の漢語表現を使った「愛鳥家」なる表現は確かによく使われ、簡潔で意味も分らぬわけではないが、単音節語から成る漢字三語の響きはやはり何となく日本人には馴染みにくいもののあることは否めまい。誠に厄介な問題ではある。その他筆者が何となく好きになれない漢語に依る造語で、その響きに馴染めない語として「手話」「視聴者」「聴取者」「学活」「迎撃機」「美化語」等々挙げて行けばキリがない。「学活」は「学級活動」の略であろうが、何とも頂けない。「落研」なども訓読みと音読みとが同居していて、更に略して云っているわけだが、筆者などは好きになれぬ響きである。漢語は造語力が強くいくらでも組合わせて新語を作って行けるし、又略して云うことも可能であろうが、その語の「響き」に無頓着であってよい法はなからう]

(14) **Mrs. Gilliam Gould, West Middlesex Monday Club secretary** [「ウエスト・ミドルセックスにある月曜クラブのセクレタリーをしているギリヤム・グールド夫人」とでも訳そうか。いずれにせよ英語では見事に名詞が並んでいる。一般に英語では同格関係を表わすのにそのまま名詞を並列的に列べればよい。そのことが一つには簡潔さと名詞表現を作ることに寄与している]

(15) **a pen-and-ink sketch** [「ペン字で画いたスケッチ」or「ペン書きのスケッチ」いずれにせよ、英語では「画く」とか「書く」とかの動詞は使われていない。**pen** と **ink** を **and** でもって並列させて、それを形容詞的に働かせてそれなりの意味を表出させている。如何にも英語らしい名詞表現ではある。**a tooth-and-claw struggle** (「必死の戦い」)、**cock-and-bull story** 「まゆつば物」なども同類の表現法である]

(16) **a narcotics detective** [「麻薬取締官」これも英語には「取締り」なる語はない。どうしても日本語訳では「取締り」なる用言性の強いコトバが必要となるのであろう]

(17) **He was not part of the conspiracy.** [「彼はその共同謀議に加担していなかった」日本語訳では、「加担する」とか「関与する」とかの動詞が用いられるわけだが、英語の場合それらの **colorful verb** は用いられず、名詞の部分に意味が集約され、動詞は **colorless verb** としての **be** 動詞が用いられているに過ぎない]

(18) **The doctor nodded his head in assent.** [「医者は頷いて同意を表わした」日本語訳では、動詞が二つ必要となろうが、英語の原文では動詞は一つしか用いられて居らず、「同意を表わす」or「同意する」の部分は、**in assent** となって、名詞が用いられているのに注意されたい]

(19) **A: Be my guest!** (遠慮するなよ。)

B: Thanks. It's on me next time. (ありがとよ。でも次は僕のおごりだよな)

[**Be my guest!** などは仲々英語らしい名詞表現だ。**It's on me.** なる口語表現も考えてみれば、何らの **colorful verb** も使用されていない。**be** 動詞と前置詞で済ませているところが憎い]

(20) **Better luck next time!** [「次はうまくやれよな。」 **Good luck!** と云うのがあるが、それを若干変形させて行った表現と見てよかろう。いずれにせよ **luck** と云う名詞が効いている]

(21) **Hey, what's the story? Do I have anything you want?** [無様に頭の先からつ

ま先まで (from head to toe) ジロジロ見つめる人間に対して云う様なセリフで、「やい、一体何んだって云うんだ。あんたの欲しい物でも俺が何か持ってるだけでも云うのか？」とでもなろうか。what's the story? の部分が名詞表現となってをり、如何にも英語らしい発想と表現法ではある]

(22) This is my busiest night. [「今夜は全く忙しくてやりきれないよ。」my busiest night の部分がやはり「形容詞＋名詞」と云う「名詞止メ」の型をとった名詞表現となっており、日本語の「今夜は忙しい」の文型と異なる。勿論英語においても一応「S＋V＋C」の文型をこの場合取ってはいるわけだが、表現の中心はこの場合、SにもVにもなくCの部分に集約的に置かれている。日本語訳では名詞へと集約していく形式をとっていない為、どの部分が強調されているのか尠くとも形の上からだけでは判定しにくい。それに比しこの英文では this でもis でもなく、my busiest night の部分に文意の殆んど全てが集約されていることは余りにも明白である。]

(23) We'll be on our way on vacation. [「私達は休暇には出かけることにして居ます」ここで問題となるのは、和訳では「出かける」と云う謂わば colorful な動詞が使われているに比し、英文では動詞は colorless な be 動詞しか用いられて居らず、on our way の部分にこそ文意の重点が置かれている。つまり名詞的な部分に表現の中心を置いて、動詞は colorless verb にしてその役割は軽い]

(24) Thank you for your trouble. [「お手数かけてすみませんでした」これは何とも訳しにくい英文である。そもそも日英両語間に於いて、「ありがとう」と「すみません」の使用法が場面に依りて異なることは周知の事実である。ここではその問題は問わず、for your trouble の部分だけを考えてみるに、これは、「あなたが私の為に色々面倒な事をしてくれたこと」に対して私が感謝しているのであろう。いずれにせよ、上述の内容を your trouble だけで表現しているところに名詞表現の簡潔さが窺えるのである]

(25) That winter was a cold, sad, and difficult one. [「その冬は、冷たく、悲しいそして又きびしい冬だった」これは云うまでもなく、winter を one で受けた典型的な「名詞止メ」の英文だが、日本文はどちらかと云えば「S＋V」文型が圧倒的に多く、「S＋V＋O」文型は云うに及ばず、「S＋V＋C」文型ですら英文に比し、はるかに少いと云える。更に極論すれば、日本文ではそのSすらもVの中に呑み込まれかねない。日本文にはよく「主語がない」とか「主語が省略される」などと言われることがあるが、実は「動詞の中に主語が呑み込まれている」と云った表現の方が当たっている場合が多い。特に異常なまでの発達を日本語の中で遂げている敬語語法もその中心部分は動詞・助動詞・補助動詞などに在り、それらが主語の不在を cover していることが多いのである]

(26) We'd better get a move on. [「とにかく急いだ方が良さそうだ」この英文を見ていただければ分ることだが、「急ぐ」と云う colorful な動詞 'hurry' は出てこない。例の get なる colorless verb に極めて用言性の強い名詞 move を組合せて get a move なる型、つまり結果的にやはり「S＋V＋O」なる英語に最も基本的な文型、つまり他動詞を用いた構文にしているのである。換言すれば、英語に於いて、他動詞の多用と愛用が、必然的に名詞構文を生み出しているとも云い得るのである]

(27) A: May I come with you half way?

B: By all means.

[Aが「途中まで御一緒してもよろしいでしょうか?」と云っているのに対し、Bが「どうぞ、どうぞ」と云っている。Aの云う half way の部分が何らの前置詞も伴なわ

ず、ムキ出しの名詞が添えてあるだけだが、結果的にこの名詞が副詞的に用いられているのである。日本語の「どうぞ」も、どうも分りにくい語構成だが、英文の **by all means** もやはり一応副詞句の形はとっているが、表現の中心は **all means** なる名詞の部分に置かれていると云ってよい]

28) **The minimum requirements are to have good command of English and to be a good stenographer as well as a typist.** [「最小必要条件としては、英語を十分にこなし、タイプは勿論のこと速記の方もよく出来ることである」ここでの名詞表現は **to have good command of English** の部分と、もう一つは **to be a good stenographer as well as a typist** の部分とである。前者は「他動詞+目的語」の型であり、後者は、タイプや速記がうまく出来ると云うのを、例の「～出来る人」の型で表わしている。つまり「料理が上手である」と云うのを「上手な料理人」**a good cook** と表現する類である]

29) **Please give an account of what happened there.** [「そこで何が起ったのかどうぞ説明して下さい」ここでは「説明する」と云う漢語サ変動詞を用いて和訳しているが、勿論日本語でも、「V+N」の型をとって「説明を与える」とか「説明を行う」などと云えぬわけではない。英語では又々例の「**colorless verb+N**」の型をとって **give an account of**～として用いることが多い。ところでこの事に関連して一つ興味深い問題がある。それは中国語に於いても同様の事実があるのだ。つまり中国語に於いて、この例で云えば、「解釋」なる語を動詞としても用いるのであるが、それを名詞に用いて目的語として、その代りに **colorless verb** として「做」を用いるのである。つまり「做+解釋」の型をとって「解釋する」と云う動詞の意味を出すのである。同様の例として、作報告(報告する、演説する)、作斗争(斗争する)、做練習(練習する)、做買賣(商売する)などがあり、これらはすべて「V+O(名詞から成る)」の型になっているが「做」や「作」を取り去れば、名詞としてO(目的語)に使われていた部分は、すべてそのまま(動詞)に変身するのである。ところで、「詳細に解釈する」と云う和文は、中国語では、「詳細地做解釋」とか「做詳細的解釋」と表現出来るのである。特に後者の場合は「詳細的」と云う形容詞が名詞の前に添えてあり、文字通り、具体的で、詳細な表現を可能にしている。この辺りの事情は英語でも全く同様のことが云えるのであって、**give a detailed account of**～(～を詳細に説明する)と表現される。最後にもう一つ先述の「作斗争」が用いられている実例を挙げておこう。「**跟修正主義作堅決的斗争**」この場合「作」が **colorless verb** として、名詞に用いられた「斗争」を目的語にとっている。更に「堅決的」の部分は副詞にならず形容詞となって名詞たる「斗争」を修飾する。正に英語の典型的な名詞表現と同類の表現形式であり、中国語にもその様な「名詞表現」が存在していたことは驚きでもあり、今後の中国語に於ける「名詞表現」研究への励みにもなる]

30) **Let's have a bite to eat before we go to the movies.** [「映画を見に行く前に、ちょっと簡単に食事しておこう」ここでは **have a bite to eat** なる口語表現が如何にも英語らしい名詞表現を作っている。日本語で云うと「ちょっと何かパクつく」と云った感じだ]

31) **Students often go Dutch treat when they eat out.** [「学生は外食する時にはよく割り勘にする」ここで **go Dutch treat** (**go Dutch account** とか単に **go Dutch** と云う)の部分で、**Dutch treat** なる名詞部分が **go** の後に何らの前置詞も伴わずに並べられているところがミソで、**go Greyhound** (グレイハウンドで旅行する)などもその類いである]

(32) **She told the lady to go out exit number 7.** [「彼女はその婦人に7番出口から出るように云った」この場合 **go out** と **exit number 7** との間に **of** が省略されていると考えてもよいが、特にアメリカ英語ではこの様に **of** が抜きで **go out** の後にいきなり名詞をもって来ることが多いのである]

(33) **It's our pleasure to have you back here.** [「あんたがここへ戻ってきてくれて私達は嬉しいよ」**pleasure** なる名詞を用いている事も然る事ながら、**to have you back here** のくだりも如何にも他動詞を用いた英語らしい表現であることに留意したい]

(34) **He got the sack for his neglect of public duty.** [「彼は公務怠慢の廉でクビになった」**get the sack** は **have the sack** とも云う。**his neglect of public duty** の部分は例のネクサス実詞「Nexus Substantive」と云われる文法的カテゴリーに属するもの。いずれにせよ、この二つの点でこの文は簡潔な名詞構文となっている]

(35) **They had a big midnight fight.** [「彼等は真夜中に大ゲンカしよ」何の変哲もない様な文章だが、日本人としては「真夜中に」とらわれて **at midnight** と副詞句を用いて書くのではなからうか。仲々 **a midnight fight** なる発想は出にくいのではないか。又 **a midnight fight** とすれば否定なしに **colorless verb** を使わざるを得なくなり、全体として名詞構文となる。これで思い出したが、例のShakespeare 作の喜劇に **a Midsummer Night's Dream** 「真夏の夜の夢」と云うのがあるが、現代米語の感覚からすれば **Night's** の **apostrophe s** は省略され得るのではないだろうか。そうすると生の形の名詞が3つ並ぶ「N+N+N」型となる]

(36) **Let's all do the gardening.** [「みんなで庭いじりしよう」例の **do the~ing** の型である。**do the shopping, do the reading** 等々数多くこの型の名詞表現は存在する。「買物する」とか「読書する」など日本語の漢語サ変動詞と類似した表現とも云える。この **the** の部分は色々の形容詞的働きをもった語に代替可能である。**do some shopping** とか **do a lot of reading** などと用いられる]

(37) **She was so scared that words failed her.** [「彼女は怯えて物が云えなかった」後半部の **words failed her** なる他動詞構文をじっくり味わいたい。なお、**fail** には **He failed English.** (彼は英語で落第した) などの用例もある]

(38) **"You had a phone call, Johnny".** [「君に電話があったよ、ジョニー」これも何の変哲もない文だが、いざとなると意外に出てこない表現でもある。日本人には何時になっても「S+V+O」文型は馴染みにくいものなのであろう。日本語には「状況中心の説明文」の多いこともこれに関係がある。中国語にある「是~的」構文とも関連があるかも知れない。英語では話題に直接関与する人間を主語とすることがこの場合には多い]

(39) **He was badly wounded in a machine-shop accident.** [「彼は機械工場で起った事故で重傷を負った」ここで問題となるのは、「機械工場で起った事故」のくだりが、英語では単に名詞を羅列させて **a machinshop accident** としているが、日本語の普通の云い方としては、「機械工場で起った事故」の如く、動詞を添えたいところである。これと同様の例に **the basement apartment assault** (その地下のアパートで発生した襲撃事件)、**his soccer knee** (彼のサッカーで傷めた膝) などがある。**a Harvard man** (ハーヴァード大学出の男) 等]

(40) **A: Shall we ask him for help?** (彼に助けを頼もうか?)

B: He'll be no help. (彼では何の助けにもならないよ)

[特にBのセリフの **be no help** の部分に注意したい。**no help** については色んな説明

が文法的に可能であるが、それはさておいて、ここではこの簡潔な名詞表現を味わっておきたい]

(41) A: He's particular about food. (彼は食べ物にはうるさいんだよ)

B: Is he a good judge of it? (ほんとに食物のこと分ってるのかねえ)

[特にBのセリフの a good judge of~の部分に留意したい。He's a good judge of human nature. (彼は人情をよく解する) などにも使われる]

(42) A: What's the hurry, Joe? (何を急いでるんだい、ジョー?)

B: I've got to catch the 4:30p.m. London bus. (午後4時半発のロンドン行き
のバスに乗らなきゃならないんだよ)

[Aのセリフの the hurry の hurry は動詞ではなく名詞であること、更にBの午後4時半発のロンドン行きバスのくぐりゃは英語では名詞をそのままズバリと羅列させて the 4:30p.m. London bus と簡潔に表現されている点に注目されたい]

(43) When he'll go to America is anybody's guess. [「彼がいつアメリカへ行くのかは、全く誰れにもわかりやしない」これに関連して英語の諺めいたものに、Anybody's guess is nobody's guess. (人によってどうにでも予想出来る場合は、実際は誰れにもハッキリはわからない) と云うのがある]

(44) Well then, let me give you a piece of my mind. [「それじゃ、卒直なところを云わせてもらおう」これは例の give~a piece of one's mind の表現で、dative verbたる give を使い、目的語を2つとる「S+V+O+O」文型での名詞表現は数多い]

(45) I'm going to swim way down there. [「僕はずっと向うの方で泳ぐつもりだよ」way なる名詞が副詞として使われている例]

(46) You must act your age, Frankie. [「フランキー、君は年相応に振舞わないといけないよ」act と your age の間に何も介在せず、直結されているところに迫力(punch)が感じられる。似た表現として act the knave (悪人ぶる) や act the lord (お大尽ぶる)、act the fool (道化役を勤める、馬鹿なマネをする) などがある]

(47) Nowadays we are very busy people. [「このところ私達は大変忙しい日々を送っているのです」まさか「私達は大変忙しい人達なんです」とは日本語では云うまい。ここではやはり先の様な訳にするしかあるまい。併し英語ではちゃんと名詞表現になっている。つまり busy people と云う表現を使っているのだ]

(48) I never fall for his fool idea. [「彼の馬鹿げた考えなんぞには決してだまされないうぞ」ここで本来名詞である fool が形容詞的に使われているが、これは米国語法と考えるとよい。fall for (~にだまされる) の表現も、もとは American colloquialism から来たものである]

(49) Do you have the time? [「今何時でしょうか」どうもこの表現も日本人には馴染まぬものの一つである。さりとて同様の意で What time do you have? と聞かれてもやはりピタリと肌合う表現ではない。つまり日本人にとっては「S+V+O」の他動詞構文はどこまでも馴染みにくい表現形式である様だ]

(50) Small world! [「世間は狭いね。」例の名詞をそのままぶつける形での間投詞的表現である。更に若干の例を掲げてみる。No sweat! (平気だ/案じることはない/)
Skittles! (バカ云うな/下らん/) Holy cow! (ヒェッ/まあ/) Rats! (チェッ/くそ/まさか/) Stuff! (バカ云え/下らん/) Poor devil/ (かわいそうに/) Big deal/ (大したもんだよな/) Great guns/ (オヤ/しまった/) Curse! (畜生/)

Rubbish! (バカ云え!/) **The idea!** (あきれた!/) **Bother!** (うるさい!/, イヤだ!/) **No cracks!** (ツベコベ云うな!/) **All my eye!** (バカバカしい!/) **Shucks!** (下らん, ここに掲げたわずかな例は「名詞表現」としての英語の感情表現のそれであって、英語にはまだまだ各種の相を持った多彩な感情表現がある。一般的に云って日英両語に於ける感情表現の差異は奈辺に存するのであろうか。自立語としての間投詞ないしは感動詞を用いる場合については、先述の如く英語では名詞そのものが間投詞的に使用されることが多い。それに比し、日本語では、どちらかと云えば、それ自体はあまり特別の意味を持たない。例えば、「カケ声」的なものが感動詞を形成していることが多い。それでは具体的な感情表現は日本語ではどの様に行われるかと云うに、ここに終助詞が登場するのである。つまり助詞と云うのは付属語であって本来それ自体としては特別な意味を持たぬ、他の自立語に附属して用いられてはじめて具体的な意味を持つ。つまり日本語ではその様な付属語である終助詞にかなりの部分その感情表現を依存しているのである。この点が正に英語の感情表現との決定的な差であって、英語では終助詞などは当然なく、すべて自立語である間投詞や、場合によって名詞が間投詞的に使われたり、更にちゃんとした文形式をとって感情表現が行われるのである。これらの問題についてもっと突込んだ議論をしたいところなのだが、当小論文の主旨はそこになく、紙数の関係もあり、ここではこれ以上の深入りは許されない。いずれにせよ、この感情表現の分野こそは、日英両語がその決定的な相異を見せる分野であり、英語研究に携わる者にとって興味の尽きないものである。中国語に於いても語気助詞なるものがあるが、日本語の複雑な助詞の用法に比べて遙かに見劣りがする。日本社会に於ける極めて複雑な人間関係の様態を反映したものが正に助詞・助動詞と云った付属語の多用と関係しているものと思えてならない。これを要するに、日本語での感情表現の多くは主としてその付属語の部分に依存する率が高く、文体の様態は比較的自由であるに比し、英語では謂ゆる機能語よりも内容語、更に文体の様態そのものに依存する率が高いと云える。中国語に関しては又してもこの場合両者の中間に位置する様である。更に感情表現と云うことになると、当然にも音声面の問題が生じて来るのであって、その面を無視して議論は出来ない。例えば声の抑揚、調子、強弱のリズム、間の取り方、更に身振り手振り、顔の表情等々非言語的な側面も入ってくる。その辺りが、英語と日本語の異なるところで、これは又別に議論しなければならないわけだが、一般的に云って英語に於いて音声面の要素が重視されることは間違いない所で、その感情表現に占める重要性は日本語の場合と比べて遙かに高いと云える]

51) **Your tears are womanish.** [「君が涙を見せるなんて女々しいぞ」英語では「涙を見せる」とか「泣く」に相当する部分は **tears** なる名詞で表現し、**your tears** でもって「君が涙を見せる」なり「君が泣く」などの日本語の文章体表現に代えている]

52) **She looked at him in silent wonder.** [「彼女は余りにも驚いて物も云えず彼を見た」**in silent wonder** の部分が例の「前置詞+名詞」型の名詞表現となつてをり、その名詞の前に **silent** なる形容詞がついているわけだが、これと同様の意味で、**in speechless amazement** などとも云える。なお **in openmouthed wonder** などと云えば、「余りに驚いて口をポカンと開けたままで」なる意味となろう]

53) **"Did you get a make on it?" Malloy asked, pulling to a stop.** [「その車はこの何製のものだったかつかめたか?」とマロイは車を横付けにして尋ねた。この **get a make on it** なる表現の **get a make** は例によって「S+V+O」の他動詞の構文を作っている。更に **make** が名詞に使われている点にも注意されたい。 **What make is**

your car? 「君の車はどこ製のものかね?」に於ける **make** も名詞に使われてをり、更にこの場合厳密に言えば、前置詞 **of** が **what make** の前に来るべきなのであろうが、それをつけないところが簡潔な名詞表現を作っているとも云える。更に **pulling to a stop** の部分も **stop** は名詞なのであり、日本語の様に「車を停める」と云った様な動詞にはなっていない]

54) **He avoided any mention of the murder case.** [「彼はその殺人事件に何も口をさしはさむことを避けた。」**mention** の部分が動詞でなく名詞になっているところが名詞表現たる由縁であるわけだが、**He made no mention of the murder case.** と云ってもほぼ同じ意味のやはり名詞表現である]

55) **One of his most frequent visitors was his next-door neighbor, Ettore Zappi, a mattress manufacturer.** [「彼の家を屢々訪ねて来る者の一人は、隣人のエトレ・ザピで、彼はマットレスの製造に携わっていた」「屢々訪ねて来る人達」のところが英語では **most frequent visitors** の如く名詞的に表現されている。更に最後の部分の **a mattress manufacturer** の部分も、日本語でも名詞表現に出来なくもないが(勿論その場合でも当然漢語の力を借りなければならぬわけだが)、よくこの様な場合に、日本語で動詞を用いて文形式をとっているのに比し、英語では名詞句になっている場合が多い。「彼はクラスの中で一番水泳が上手い」と云う場合でも、英語としては、**He is the best swimmer of all in the class.** の如くやはり **swim best** の様な「動詞+副詞」結合よりも、**the best swimmer** の様な「形容詞+名詞」結合に持つて行く方が英語としてはより自然であるし、又その方が文章表現としてもこの場合はより効果的である]

56) **It is a common observation that few persons can be found who speak and write equally well.** [「話の方も書く方も同じ位巧みにこなせる様な人は殆んど見当たらないと云うのが一般的に見て云えることである」ここでは云うまでもなく **a common observation** の部分が「形容詞+名詞」結合となって名詞表現を形成しているわけだが、この辺りは日本語では通常「副詞+動詞」結合となることが多い。**It is common knowledge**~, **It is public complaint**~とか、**It is common practice**~等々この型の名詞表現も数多い]

57) **Much has been written in praise of solitude.** [「孤独でいることの良さについてこれまで多くの事が書かれてきた」ここでは **in praise of** の部分が名詞表現と云えるのだが、この様に「前置詞+名詞+前置詞~」の型の名詞表現は実に数多く英語に見出される。例えば、**in support of** (～を支持して)、**in defiance of** (～に反抗して)、**in honor of** (～を祝して) **in aid of** (～を助けて)、**with regard to** (～に関して) **in favor of** (～に賛成して) 等々、いくらでも挙げることが出来る]

58) **They sought after their own interests in total disregard of the welfare of others.** [「彼は他人等の福利などを全く無視して自分自身の利益のみを追求した」実はこれは前項の「前置詞+名詞+前置詞~」の型の名詞表現なのだが、その名詞の前に **total** なる形容詞がついている。日本語ではこのところはやはり「副詞+動詞」結合となるところである。いずれにせよ **in total disregard of** ~の表現形式は非常に英語らしい名詞表現で、逆に和訳の方を見てこの様な名詞表現を使った英文が書けるかどうかを自問してみれば、この英語表現が日本語の表現に遠い表現であることに気付くだろう]

59) **The University of California issued repeated warnings against hitchhiking.** [「カリフォルニア大学ではヒッチハイキングをしてはならないと云う警告を繰り返して

行った」**repeated warnings** と云う表現をとることによって、**issue** なる他動詞が使えることと、**against** なる前置詞が動詞否定文の代りをつとめている。結果として日本語の訳文とはかなり異った文型、表現形式となっており、やはりこれが英語なんだなどの実感を持つ。つまりこの文は英語の基本形である「S+V+O」文型であり、更に前置詞 **against** を用いることで動詞の多用を避けると同時に、**hitchhiking** なる名詞が強く浮彫りされるのである]

(60) **"Oh,"he smiled in relief.** [「あっそう」とばかり、彼はホッとして微笑した。**in relief** なる句もやはり前置詞と名詞の結合型であるわけだが、その場合は当然にも内容語 (content word) たる名詞の方に **prominence** が置かれ、機能語 (function word) たる前置詞の方が軽い]

(61) **It's a long story.** [「それは話せば長くなるよ」英文では一目瞭然、名詞的表現になっていることが分るだろう。「それは又話が別だよ」など云う時に、**That's a different story.** などと云う。]

(62) **Contrary to popular belief, personal relationships were important to Stalin.** [「一般に信じられているのと違って、個人的なつながりと云う事はスターリンにとって大事なことだったのだ」ここでは **popular belief** の部分に名詞表現が見受けられる]

(63) **The hospital was located some distance outside the city.** [「その病院はその街から少し離れた所にあった」ここは **some distance** なる名詞が前置詞を伴わず、そのままの形で副詞的に使われている]

(64) **His family kept a close check on his activities.** [「彼の家族の者達は、彼の行動に細心の注意を払って見守っていた。」例の「**colorless verb+名詞**」の型の名詞表現である。更に **close** なる形容詞が名詞 **check** を修飾している。いずれにせよ、**keep a close check on~**の型も典型的な英語名詞表現の一つである]

(65) **Most Americans drink coffee in preference to tea.** [「大抵のアメリカ人は紅茶よりもコーヒーの方を好んで飲む」これは **in preference to~**の部分が名詞表現となっているわけだが、この型の名詞表現については先述したので、ここではこれ以上述べないが、日本語ではこの所はほとんど動作動詞を用いた叙述表現となる]

(66) **Are you in favor of Britain's entry into the Common Market?** [「あなたは英国が共同市場に加わることに賛成ですか?」ここでは **in favor of** の部分と **Britain's entry into~**の部分とに名詞表現が見受けられる]

(67) **The question was discussed at large.** [「その問題は詳細に論議された」ここでは **at large** なる句が例の「前置詞+名詞」の型をとっている。ここでの **large** は形容詞ではなくて名詞であることに注意されたい。同様の例に、**The murderer is still at large.**「その殺人犯は未だ捕まっていない」があり、この場合の **at large** もやはり前例と同類の型であるが、意味は異なる]

(68) **It began raining in earnest.** [「雨が本格的に降り始めた」これも「前置詞+名詞」型の名詞表現である]

(69) **He made reference to the general election.** [「彼は総選挙のことに言及した」これは「動詞+名詞+前置詞」型の名詞表現で数が多い。**take pride in** (誇りにする)、**take pleasure in** (～を楽しむ)、**find [fault with** (～にケチをつける) **take care of** (～に注意する) 等々、いくらでも挙げられる]

(70) **Study!** [「とんでもない!」「バカ云え!」など間投詞的に使われた名詞 **Study** で

あるわけだが、日本語では名詞一語ズバリが間投詞的に使用される例は少い。実はこの様な感情表現に使われる口語的な英語については次の機会に詳しく見たいと思っているので、ここではあまりその例は挙げない。なお、**What study!**で、「何だ、下らない」などとも使える。いずれにせよ、**study**が名詞であり、「下らないもの、たわごと」などの意であることに留意されたい]

(71) **He was all business, at last finding himself a grass widower.** [「彼は商売にばかりかまけていて、とうとう自分が妻に逃げられて仕舞う羽目になった」ここでは **all business** と **a grass widower** (妻と別居している夫の意) の2ヶ所に名詞表現が見られる。**all**+名詞(特に抽象名詞の場合が多い) もよく散見する例である。**She is all kindness.**「彼女は全く親切な女である」**He is all attention.**「彼は神経をピリピリさせて注意している」**She is all beauty.**「彼女は大変な美人だ」、**She is all woman.**「彼女は本当に女らしい女だ」、**She was all life and happiness.**「彼女はいつも生々として、幸せそのものと云った風だった。」等々がある。これと同様の意味で「抽象名詞+**itself**」の型もある]

(72) **Can I have the loan of your bicycle?** [「あなたの自転車お借り出来ましようか?」日本語にも入っている **loan** (ローン) なる言葉を使って、**{have the loan of~}**の形をとった名詞表現である]

(73) **Beggars must not be choosers.** [「乞食は貰い物にケチをつけてはいけない」との意の諺であるが、**choosers** なる名詞の使い方が英語らしい。日本語だとやはり「選り好みする」の様な動詞を使いたくなるところだ]

(74) **Take no thought for the morrow.** [「明日の事を思わずらうなかれ」の意の諺であるが、やはり英文では **thought** なる語が名詞として使われているが、日本語ではその部分は動詞となっている]

(75) **Any such statement of his is just the confession that he was in on the murder case himself.** [「彼がそんな風に云うことのどれをとってみても、彼が自身その殺人事件に関与していたことを告白している様なものだ」ここでは先ず **statement** なる名詞の部分と、**confession** なる名詞、更に **was in on** の様な形の複合動詞ないしは群動詞の部分が注目を惹く。前二者の名詞表現については今更説明の要もあるまい。普通のこなれた和文としては、その部分は当然動詞で表現されるよう。**be in on** の型の述語であるが、これは別に **be** 動詞に限ったわけではないが、とにかく非常に分析的、統語的な型の述語部分を構成している。「動詞+副詞+前置詞」の型と云っても良からうか。動詞としては主として **colorless verb** が来る。勿論この場合の様に **be** 動詞も来る。その例として外に、**be in with**, **be up to**, **be out for**, **be up for**, **be in for**, **be up in**, 等々があるが、いずれも生の動作動詞が用いられていず、すべて **be** 動詞が用いられているのだが、日本語ではどうしても **colorful verb** の使用が必要となろう。つまりこの様な特に **be** 動詞を用いた型の群動詞なるものも一種の名詞表現の性格を立派に具えていると云ってもよい]

(76) **Your best won't make the situation any better.** [「君がどんなに一生けんめいやってみたとところで、その事態を好転させることにはならないだろう」**your best** の部分が謂ゆる名詞表現を構成しているわけだが、日本語的表現とはかなりかけ離れた表現であるだけに味い深い]

(77) **It was really an effort for me to understand his Pidgin English.**

〔彼のピジン英語を理解することは私にとって本当に骨の折れることだった〕 **an effort** の部分が名詞表現となっている。因みに、**Pidgin English** と云うのは、元々は中国南部 廣東港などで通商の目的の為に、中国語の文法に語彙だけを英語を用いた様な形の土着英語の事であったが、今では一般に広く、東南アジア、メラネシヤ等の南太平洋諸島、更にはアフリカ旧英国植民地の現地語と混り合った英語も **Pidgin English** と呼ばれる。因みに **Pidgin** とは広東語の方言で **business** の意らしく、つまり **Pidgin English** は元々通商目的の為の **Business English** であつたらしい]

⑦⑨ **She has a fine breaststroke.** [「彼女は平泳ぎが上手だ」これもやはり「S+V+O」の他動詞構文となっている。breaststroke に代えて backstroke と云えば「背泳」の意となる]

⑦⑩ **Be a sport!** [「スポーツマンらしく正々堂々とやれ!」この場合の **sport** は口語で「スポーツマンらしい人」の意。いずれにせよ名詞表現の典型例の一つである。sport なる語には種々の意味があるが、**make sport of** なる名詞中心的イディオムは「～をバカにする」とか「～をからかう」などの意となる]

⑧① **The local newspaper has a limited circulation.** [「その地方紙の発行部数は知れたものだ」これも既に今まで何度も触れてきた「S+V+O」文型をとり、「名詞止メ」にすることにより、全体として日本文とは異なった英語らしい表現となっているわけである]

⑧② **This new product has a large sale.** [「この新製品はよく売れている」これも英文では「S+V+O」文型にすることで名詞表現が可能となっている]

⑧③ **He has a strong aversion to any foreign language.** [「彼はおよそどんな外国語もひどく嫌っている」これは **have aversion to** なる成句を用いたわけだが、云うまでもなく **aversion** なる名詞がその中心に据えられている点で名詞表現なのである]

⑧④ **Grief has silvered his hair.** [「悲しみの余り、彼の髪は白髪になってしまった」これは **grief** (悲しみ) なる抽象名詞が主語に立つ典型的な英語名詞構文の一つである。元来日本語には(特にこの場合は大和言葉をさす)抽象語が少なく、更に又抽象名詞が主語に立つ文も日本文には馴染まない。今では漢語やカタカナ外来語の影響でかなりの抽象語が日本語の中にも散見され得るし、又抽象名詞が主語に立つ文章も日本文の中に数多く見られる様にはなったが、併し本当にこなれた分り易い文となると、やはり抽象語や抽象名詞主語の文は少い様である]

⑧⑤ **He did it with perfect ease.** [「彼は全く容易にそれをやってのけた」これも今更云うまでもなからう「前置詞+名詞」型の名詞表現で、ここでは **perfect** なる形容詞が名詞 **ease** の前についている。easily なる副詞よりは **with ease** と名詞を用いて云った方がやはり **Punch** が効いてをり、又印象も鮮明であり、所詮生の形の副詞は、「前置詞+名詞」型の副詞句の **Punch** (迫力) に及ぶべくもない]

⑧⑥ **He even paid a call on Lynda's new tennis partner.** [「彼はリンダの新しいテニスのパートナーを訪ねさえもした」ここでは **pay a call on** 型の名詞表現が使われているが、外に **pay a visit to** と云ってもよい。いずれにせよ「訪問する」と云う部分が日本語の様に生の形の動作動詞は用いられず、名詞が目的語となってそれに **colorless verb** の **pay** が他動詞として用いられている。英語の好みの型なのである]

⑧⑦ **He smiled his thanks.** [「彼はほほえんで感謝の気持を表わした」日本語訳の場合どうしても2つの動詞が必要となるところだが、英文の様な表現の仕方では動詞は1つで

済む。同様の例として, *On seeing us, she smiled her welcome.* 「私達を見るや否や, 彼女は微笑して歓迎の意を表わした」

⑧7 *She is a wonder woman.* 「彼女は不思議な女だ」 *wonder* なる名詞が形容詞的に使われていると見てもよい。同様の例として, *It is a wonder drug.* 「それは特効薬だ」などがある。どちらの場合も *wonder* に代えて *miracle* なる名詞も使える。いずれにせよ「N+N」型結合による *Punch* の効いた表現効果を狙ったものであろう

⑧8 *He is a newspaper reporter friend of mine.* 「彼は私の友人の一人で新聞記者をしています」この場合は3つの名詞が「N+N+N」型結合をしている。その為不必要に動詞を介在させなくて、簡潔に表現出来るメリットがある。*her doctor husband* と云うと「彼女の医者をしている夫」の意であるが、この場合は代名詞が来てあと名詞が2つ並ぶ。いずれにしても動詞を使う必要がないだけ、表現としてはスッキリとしていて単純明快でよろしいのではないか

⑧9 *Any identification?* 「何か身分を証明出来る様なものをお持ちですか？」和訳の方は何とも冗長な文形式を整えた表現ではある。それに比し英語の方は名詞をズバリ投げかけているだけで、完成された文形式はとっていない。この様な例も又数多く、この辺りの日本語による表現様態との差は大きい。つまり日本語では、公式の場では勿論の事、私的な場面でさえも「丁寧体」が要求される為、英語の様なただ名詞だけをぶつける様な *brusque or blunt* な表現様態はとれず、どうしても冗長極まる文形式とならざるを得ないので、この辺りの問題については又次の機会を待ちたい

⑨0 *They all came to Torrio hat in hand.* 「彼等はみんなかちこまってトリオの所へやって来た」*hat in hand* の原意は「帽子を手にして」であるが、それより「かちこまって」or「恐縮して」などの意となる。いずれにせよこの様に前置詞も動詞も用いずに、名詞をムキ出しのまま据え置いた表現は印象が強烈・鮮明で、それだけに *punch* の効いた表現を可能にするのである。*gun in hand* となると「銃を手にして」などとなる。*hat* で思い出したが英語の俗語で *My hat!* なる間投詞的表現があるが、これも名詞を投げつけているだけで「オヤマア、」の意である

⑨1 *Do you have time for a quick cup of coffee?* 「ちょっと簡単にコーヒー一杯飲む時間お有りですか？」*do you have time* の部分は例によって英語では「他動詞+目的語」の型をとっているに比し、日本語では「時間が有る」の様に自動詞構文となっている。中国語でもちゃんと他動詞を用いた構文があり、「你有空嗎？」の場合の「有」は日本語に於ける様な自動詞「有る」の意ではなく「所有する」の意の他動詞とみてよい。次に英語では *quick* なる形容詞が使われているが、それは日本語では動詞を使って表現されるべきところが、*for* なる前置詞で済ませている為、結果的に *a cup of coffee* なる名詞を修飾する為には形容詞でなければならないのである。一方、日本語の場合だと、「ちょっと簡単にコーヒーを飲む」と云う動詞を修飾しなければならない為に、どうしても「素早く」などと *quick* なる形容詞は *quickly* と副詞にしなければならないところだ (*quick* にはそのまま副詞用法のあることはこの際問題にしない)。【結論としてこんな簡単な文章でも英語と日本語の表現にはかなりの違いが認められる。つまり英語の場合は、他動詞構文を好み、動詞使用はなるべく避け、例えば前置詞などを多用し、「副詞+動詞」結合よりも、「形容詞+名詞」結合の型を好む。而してこれらの英語の性癖とも云うべきものこそが、「名詞表現」を英語に於いて数多く作り出しているのである】

⑨2 *He was a product of the city, its schools, its politics and its courts.* 「彼は

その街や、学校や、その街の政治や裁判所などが産み出した男だったのだ」この和訳については色々の問題があり得る。つまりその気になって和訳して行けば色々の訳が有り得る。而して所詮翻訳である限りに於いて例の「翻訳調」からは免れ難い。併しこの「翻訳調」なるものが既に時久しうして現代の日本語の中に深く滲透しているのであれば、そしてその文体や表現に大方の読者が特に抵抗感を持たないと云うのであれば、実は筆者がこれまでやかましく述べ立てて来た英語に特有の「名詞表現」なるものも、現代日本語の中にもいくらかでも見出されることになる。更にこれに追討をかける事実として前述もした様に、千数百年にも及ぶ漢語借用の歴史は、日本語の文体、表現形式等を龐大な漢字・漢語使用を通して決定的に変容せしめ、そしてその変容とは本来動詞中心的性格を有していた日本語を、英語に於ける如き（場合によってはそれをも上廻る）名詞中心的性格の言語へのそれに外ならなかったのである。例えばこの例文がその良い見本である。つまり **a product of the city**~のくだりは英語では **a product** なる名詞が使われているわけだが、これを漢語を用いれば「産物」と云う具合に立派に英語に対抗出来る名詞で表現され得るのだ。これを大和言葉流に云うなら、「産み出された物」とでもなろうか、とにかくその場合は例の2重動詞が使われ、最後は「もの」と云う名詞で終ってはいるものの、英語の **product** や漢語の「産物」の様な名詞一語ズバリの表現とは程遠い。更にこの様な英文の表現が翻訳を通して日本語の中に流れ込み、単に語彙の段階に止まらず、表現様式そのものの深奥部にまで喰込んで、日本語の表現様式を根本的に変容させることも有り得るのだ。否、現に明治以来その過程は徐々に進行しつつあり、今ではその流れを堰き止めることも逆流させることも出来ない段階にまで来てしまっているのだ。これは何も明治以降の欧文脈の影響のことばかりを云っているのではない。既に奈良・平安朝の昔にさかのぼって千数百年にわたる漢語・漢文体の日本語に与えた決定的な影響については欧文脈のそれを遙かに上廻るものがあるのだ。これをもっと分り易く言えば、平安朝の女流仮名文字文学と、翻訳調と漢語多用の一典型とも云える現代の「学術論文」との間には、同じ日本語とは云え、その語彙・表現様式に於いて、これをもっと専門的な用語で云うならば、形態論的にも、統語論的にも相当の開きがあるのだ。極端な云い方をお許し願えるならば、現代の日本語は色んな意味合いで、既に外来要素に侵蝕され半植民地化された言語に成り果ててしまっていると云ってよい。その典型が正に先述の謂ゆる「学術論文」なるものである。お隣りの朝鮮半島に於いても同様の歴史的事情により、固有朝鮮語が漢語の挑戦を受け何度も危機にさらされて来たわけであるが、近年に於ける一連のハングル化政策（20世紀初頭に始まる言文一致運動は漢文体の文章を駆逐し、口語体のハングル・漢字まじり文へと移行し、現時点に至ってはハングル上位は決定的となった。つまり十五世紀中葉に李朝の世宗に依り発案されたハングル文字は今日に至って正に当初の目標であった「訓民正音」の地位を正式に獲得し得たのである。）は着々とその成果をあげ、漢語及び欧米系の外来語による侵蝕状況は日本語に於けるその様な深刻なものとは縁遠い。つまり現代の朝鮮語に因する限り、現代日本語の置かれている様な半植民地的状況どころか、立派に独立国としての体面を保っていると云えるのである。漢字の本家本元である中国に於いて簡体字化が進行し、遠い将来の漢字廃止とラテン文字採用、つまり一連のラテン化政策すら論議されていると聞く。それに比し日本における国語改革の問題は如何にして漢字制限の枠を撤廃し、出来得る限り漢字を増やし、場合によっては「仮名遣い」そのものも、尠くとも「現代仮名遣い」の改訂をすら考えているようである。そこに見られる姿勢には広く将来を見据えた「開かれた言語」としての将来の国際語化にも耐え得る革新的な日本語の姿ではな

く、あくまでも後向きの、徒らに過去の郷愁にひたらんとする「閉された言語」としての日本語像しかないのである。これからの日本語は一部 **pedant** 達の私有物ではない。広く国民大衆の為のものでなければなるまい。一般庶民は **pedantry** とは無縁である。将来の日本語のあるべき姿をめぐる真剣な論議の湧き上らん事を切望する]

(93) **Don't be a fool. You must be out of your mind.** [「馬鹿なマネは止め、お前は気でも狂っているにちがいないんだ」前半部についてはもはや言うまでもなかるう。動作動詞でなく **be** 動詞に名詞が補語として使われている。後半の文も、やはり動作動詞は使われて居らず、**be** 動詞に前置詞句+名詞と云った形をとっている。この様になるべく動作動詞を使用せず、**be** 動詞を用いて、重要な部分、肝心かなめの部分に名詞を持って来る様な型の名詞表現こそがこの項での実例に挙げられた英文なのである]

(94) **Levine denied any knowledge of the thefts.** [「レビンはその盗事件について何も知らないと言い張った」**knowledge** の部分は日本語の様に動詞にならず名詞になっているところがミソである。**deny** と云う動詞はこの様にその後抽象名詞を目的語にとって名詞表現を形成するのに便利な語である]

(95) **She listened with pretended fascination to his shop talk.** [「彼女は彼が自分の仕事のことを得々として話すのを、如何にも聞き惚れている様なふりをして聞いていた」ここでは **with pretended fascination** なる句に名詞表現を見る。つまり例の「前置詞+名詞」の型をとった副詞的用法であるが、更に **pretended** なる **p.p.** が形容詞として **fascination** にかかって行くわけだが、この辺りは如何にも英語らしい表現で、とても日本語でこの様な表現法のマネは出来ない]

(96) **I doubt the truth of this report.** [「私はこの報告書が真実であるかどうか疑わしいと思う」日本語訳では盛んに用言が使われているが、英語ではただ名詞一語 **truth** なる語が決定的な役割を演じている。簡単な文の様に思えるが、日本語訳だけを見て原文の様な英文が書けるかと自問自答してみたまえ、日本語に引きずられて冗長な複文形式で書いてしまうのではないか。云うまでもなく原文の英文は単文であり、**truth** なる名詞を用いた為に実に引締った簡潔な文章となっている]

(97) **He had always had his own way at home, and this made him a poor roommate.** [「彼はそれまで家庭でいつも好き勝手にやってきた、その為他人と同居すると云う段になると迷惑な存在となっていた」これは前半部にも、後半部にもそれぞれ独得の名詞構文が使われ、正に名詞表現の **on parade** (この句自体名詞表現である) である。前半部は **have one's own way** (自分の好き勝手にする) なる他動詞構文があり、後半部も謂ゆる「物主構文」なる他動詞構文である。ただここで更に注目すべきは **a poor roommate** なる表現で、実はこれも英語らしい名詞表現と云ってもよいのである。「形容詞+名詞」の型をとった句となっているわけだが、日本語ではこの辺りは句で表現することはむずかしく、節で、つまり動詞を用いた文形式となってしまうのではないか。以上の様な観点からこの例の英文はどこから見ても英語らしい名詞表現に満ちた文なのである]

(98) **His refusal to help was a great disappointment to us.** [「彼が援助を断ったことは私達を大変失望させた」この訳文自体バタ臭い日本語で恐縮だが、とにかく英文では動詞は **be** 動詞だけで (**to help** の **help** も動詞ではあるが不定詞の中で使われて居り、生の形の動詞ではない)、あとは名詞で重要な部分を押さえている。**his refusal** と **a great disappointment** なる2つの名詞の使用がこの文を引締まった単文構造の英文にしているので、やはりこの様な名詞表現を使わないと、日本語訳に見る様な間伸びした複

文形式の文章とならざるを得ないのであろう]

⑨ **Their room is three times the size of ours.** [「彼等の部屋は私達の部屋の3倍の広さがある」日本語訳では「の」なる格助詞が盛んに使われ、名詞と名詞をそれで繋いでいるわけだが、英文では **three times** と **the size of ours** の間に何物も介在せず、名詞がそのまま並列的に置かれている。実はこの事は色々の場面でよくある事で、日本語の場合どうしても格助詞が名詞や代名詞の間に介在して来る為に間伸びして緊迫感に欠け、迫力 (**punch**) と云った点でどうしても欠けるため、表現効果が落ちる。それが証拠に日本語でも迫力ある表現効果を狙って故意に格助詞を省略した文章や歌詞に出くわすことがある。「ヨコハマたそがれホテルの～」と云った流行歌があった様に記憶しているが、これなど当然「ヨコハマ」、「たそがれ」「ホテルの～」との間に何らかの格助詞が必要なところだろうが、こんな場合に仮りに格助詞を用いたとすれば歌の効果は台なしになって仕舞うだろう。別に格助詞に限るわけでもないが、とにかく助詞の存在が日本語の表現をして **punch** に欠けるものたらしめている事実はどうやら否定し得べくもない様だ]

⑩ **Nine o'clock. Good evening. ABC News, Washington.** [「今晩は、只今九時の時報をお知らせ致しました。ABC がワシントンからニュースをお送り致します」一つ原文の英語のアナウンスメントと日本語訳のそれとを比較願いたい。英語と日本語の「物云い」の様態の差ここに極まれりと云った感がある。如何に我々日本人がバカ丁寧な冗長な物云いの中で毎日のコミュニケーションを行っているかが痛感される好例である。英語ではただ四組の名詞が並列されているだけで、そのそれぞれをつなぎ合わせるべき何らの機能語 (**function word**) も用いられていないし、ましてや文形式など考えも及ばない。何とも「参った」と云う感じで恐れ入るしかない。英語の魅力は正にこのムダのない、スピーディで力強い迫力ある物云いにある。そしてそれはこの様な名詞表現によって始めて可能となるのである。因みに中国語ではどの様になっているのであろうか。少し文章の内容は異なるがその一つの例を挙げてみたい。

「我們這里是北京廣播電台，現在播送新聞。」（こちらは北京放送局であります。只今からニュースをお送り致します）英語のそれに比べると、文形式をとっていることはすぐに分る。併し日本語訳の様な「丁寧体」はとっていないのと、助詞が使われていないので随分と簡潔な表現とはなっている。更に発音の面では、中国語の単語は単音節語ないしは2音節語が殆んどで、日本語の場合の様な多音節語は少ない。実は英語の場合も単音節語が多く、更に殆んどの単語が閉音節であり、又子音群が語頭に立つことがある。いずれにせよ日本語の様な多音節で開音節、子音群が語頭に立たない極めて母音過多の音節構造を持つのと異なり、英語の子音過多の音節構造が男性的な力強さに満ちた響と音調を持つのは当然であろう。その様な迫力ある音節構造に加えて、名詞表現と云う簡潔・明快な文章表現形式を有する英語と云う言語が聴く人をして魅了せずには置かずとしても何の不思議もあるまい。併し中国語の方も日本語などに比べるとかなりムダのない簡潔な言い回しをして居り、音声面でも簡潔そのものであり、確かに魅力ある言語であることは間違いないところだ。一時は同文同種とまで云われた中国人と日本人ではあるが、そのそれぞれの言語を通して見る限りに於いて日中両国民の **mentality** には可成りの差異を認めざるを得ないのであり、中国人の **mentality** はむしろ西欧型のそれに近いとも云い得るのである]

以上で一応名詞表現の諸例を終えることにする。出来得る限りその諸相にわたる例を挙げようとしたが、場合によっては同じ様な型の表現が **overlap** して仕舞ったかも知れない。何しろ名詞表現の「相」が余りにも多彩多様であるために到底この様な小論文の中に

収まりきれないのであり、止むを得ず割愛したのも少なからずある。和訳の仕方については、勿論種々の代訳が有り得るのであって、ここに与えられた訳文が **best** であるなどとは毛頭思っていないし、又日本語訳の場合でも名詞的表現を用いて訳すことも可能であると云ったケースも有り得たかも知れない。筆者はこれまでも現代日本語の中での名詞表現の存在を決して否定した覚えはなく、むしろその存在を積極的に肯定して来た積りである。ただ当小論文の主旨はそこにあるわけではないので、日本語の名詞表現については説明不足の箇所もあったかも知れないので、その点お詫びすると同時に、読者諸士の御賢察をお願いしたい。

Summary

No one can deny the fact that there are a number of differences between English and Japanese in terms of syntax, semantics, morphology, rhetoric as well as sound systems. In this essay, special emphasis is placed on the description of some differences in syntax and rhetoric between the two languages.

In both languages, there is no denying the importance of noun and verb before any other part of speech. The problem is that the importance of noun as against verb is different in each language. In English, noun is given top priority in most expressions, whereas in Japanese the other way around. For example, in English, noun plays a great role in idiom-making, while in Japanese verb takes the part of it.

In Japanese, for instance, without the use of verbs, there could be no baby talk even carried on. The so-called honorific expressions, which are highly developed in Japanese, depend mostly on verbs or verb-equivalents with some particles in them. Also, it is public knowledge that the Japanese language cannot function well without much use of honorifics.

On the other hand, English lacks such highly sophisticated honorifics as can be seen in Japanese, which means the English-speaking people are more casual or even informal in their verbal communication than the Japanese.

In this connection, there seems to be much difference between the English-speaking people and the Japanese in the importance of communication they attach to. The former prefers a direct, candid way in communication, while the latter an indirect, non-committal one, beating about the bush, not coming straight to the point.

In Japanese, two or three verbs appear in succession in one sentence or in one phrase, while in English preposition as well as noun can take the place of verb. Noun signifies something visible and tangible, whereas what verb signifies is something insubstantial, comparatively. In other words, noun is far more impressive than verb. It follows that noun-centered expressions are more appealing to the listener or the reader than verb-centered ones. This seems to be the reason for the propensity of the English-speaking people for noun-centered expressions.

Japanese had been greatly influenced by Chinese for many centuries, in the

course of which Japanese had been modified into noun-oriented language to some extent because Chinese is a noun-dominated language, even more so than English. But this shouldn't be overestimated, for Japanese and Chinese are two completely different languages and as such the Japanese language was and is and will be different in many ways from Chinese as well as English. Our indigenous language, Yamato-kotoba, is totally agglutinative and most of our daily conversations are still conducted in it, and not in Chinese-influenced Japanese with a lot of Chinese loan words.

It is also important to note that word order in English has firmly been fixed since the establishment of the so-called 'Modern English' in the 16th century, that is, 'S+V+O' given top priority over any other form of word order.

In the author's view, this newly-fixed word order has greatly contributed to the fecundity of the so-called noun-oriented expressions, sentence structures which are, of necessity, followed by the transitive verb. Also, this word order made it possible for the English language to have many inanimate subject words. The inanimate used as subject words must have contributed to produce a lot of transitive verbs, too. As a result, the English language has constantly been geared to noun-orientedness in many ways. This overuse of noun in English has had a great effect on our language since the Meiji Restoration when we introduced the western culture to our soil in good earnest.

Contemporary spoken American English is geared more and more to noun-orientedness in its character, with many ellipses in its practical use. And this has something to do with the abundance of noun compounds, as well as noun-centered expressions in contemporary American English. Needless to say, great lack of honorifics in English contributes to simplicity, masculinity and incisiveness in its expressions. In other words, brevity is the soul of noun-centered expressions in the English language.

The Japanese language itself has some noun-centered expressions. They are mostly composed of Chinese loan words. Since Japanese prefers complex sentences, more verbs are found in Japanese sentences than in English ones which tend to be written in the form of 'simple sentence.' Generally, the longer a sentence is, the more verbs tend to be used in it. Chinese and English are two of the most noun-dominated languages. Chinese influence on the Japanese language has made it proportionately noun-dominant. Also, the recent influx of English loan words into Japanese has been making it more and more geared to noun-centeredness. It can be safely said that Japanese itself is really changing for the more noun-dominant.

Needless to say, the Chinese language has so far had a far greater effect on Japanese than English has had. But no one can tell what the future influence of English on Japanese will be like.